

北大構内の遺跡

XXV

平成 29 年度調査報告

第 1 部

K 39 遺跡医学部百年記念館地点

K 39 遺跡中央キャンパス教育学部北地点

第 2 部

平成 29 年度年次事業報告

北海道大学
埋蔵文化財調査センター

平成 31 年 3 月

北大構内の遺跡

XXV

例 言

- 1 本書の第1部は、北海道大学構内において平成29(2017)年度に実施した埋蔵文化財調査の成果をまとめたもの、第2部は、平成29(2017)年度に実施した事業の年報である。
- 2 調査は北海道大学埋蔵文化財調査センター運営委員会、調査専門部会の指導のもと、北海道大学埋蔵文化財調査センターが中心となって実施した。平成29年度の埋蔵文化財調査センター運営委員会・調査専門部会・埋蔵文化財調査センター員は以下の通りである(所属・職名は平成28年度のもの)。

【埋蔵文化財調査センター運営委員会】

小杉 康 委員長(大学院文学研究科 教授、埋蔵文化財調査センター長)

皆川一志 委員(理事)

高瀬克範 委員(文学研究科 准教授)

増田隆一 委員(大学院理学研究院 教授)

渡部要一 委員(大学院工学研究院 教授)

佐野雄三 委員(大学院農学研究院 教授)

山本正伸 委員(大学院地球環境科学研究院 准教授)

湯浅万紀子 委員(総合博物館 教授)

【埋蔵文化財調査センター運営委員会調査専門部会】

小杉 康 部会長(大学院文学研究科 教授)

高瀬克範 部会員(文学研究科 准教授)

増田隆一 部会員(大学院理学研究院 教授)

渡部要一 部会員(大学院工学研究院 教授)

佐野雄三 部会員(大学院農学研究院 教授)

山本正伸 部会員(大学院地球環境科学研究院 准教授)

湯浅万紀子 部会員(総合博物館 教授)

【埋蔵文化財調査センター員】

高倉 純

守屋豊人

坂口 隆

本山志郎
- 3 本書の編集は小杉 康・高倉 純・守屋豊人がおこなった。執筆分担は文末に明示した。
- 4 整理作業に関しては、以下の人々が従事した。

伊藤麻由、大村 睦、奥山晋司、川崎徳子、佐藤寿子、高倉 純、名取千春、本山志郎、守屋豊人、吉井圭子、渡辺晋世
- 5 関連科学については、下記の諸氏・諸機関に分析を依頼し、第Ⅱ章に玉稿をいただいた。

第Ⅱ章1-5-A 佐野雄三(北海道大学大学院農学研究院)、1-5-B 放射性炭素年代測定:伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・黒沼保子(株式会社パレオ・ラボ AMS年代測定グループ)、2-5 株式会社加速器分析研究所

-
- 6 関連科学分析に対する埋蔵文化財調査センター員のコメントを各節に付した。
 - 7 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる（順不同・敬称略）。札幌市埋蔵文化財センター、北海道教育委員会、北海道大学大学院文学研究科北方文化論講座、シン技術コンサル
 - 8 出土遺物・調査記録は、北海道大学埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。

凡 例

- 1 方位は真北に統一している。
- 2 緯度・経度は、世界測地系に統一している。
- 3 挿図の縮尺は、各々にスケールをいれて示した。基本的な縮尺率は以下の通りである。
遺構 焼土粒集中箇所 (DB) : 1/40
木杭址 : 1/40
土器片集中箇所 : 1/20
礫集中箇所 : 1/20

遺物 土器 : 1/2・1/3・1/4
剥片石器 : 2/3
礫石器 : 1/3
- 4 写真の縮尺は、遺構や層序については任意であるが、遺物は挿図と基本的には同じ比率である。ただし、異なる場合については明記した。
- 5 遺構図面で使用したシンボル等の凡例は図1に示した。また、遺物記号の凡例は図2に示した。
- 6 土器・石器の属性凡例図は図3、4に示した。
- 7 遺構の平面図、断面図、本文中で使用した遺構の略称は以下の通りである。HP：竪穴住居址、DB：焼土粒集中箇所
- 8 土層観察の際の色相、土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原1996)を用いた。

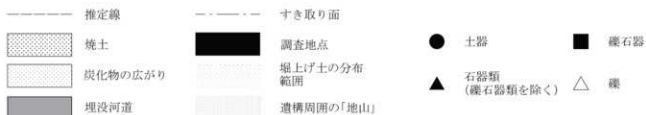


図1 図面記述凡例図

図2 遺物記号凡例図

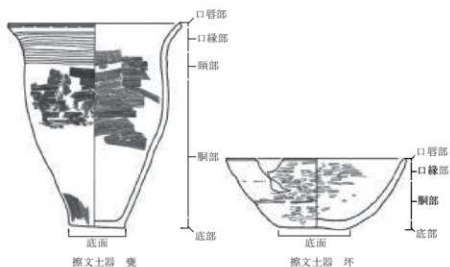
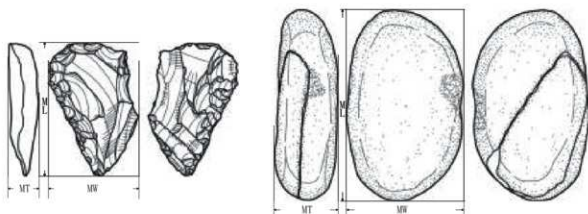


図3 器種ごとの部位名称



ML: 最大長
MW: 最大幅
MT: 最大厚

図4 石器及び礫の計測位置図

《目次》

例言	1	図6	グリッド呼称図	14
凡例	3	図7	大学構内グリッド配置図(1マス100m)	14
目次	5	図8	医学部百年記念館地点の位置と周辺の地点	15
		図9	医学部百年記念館地点の確認坑位置図	16
		図10	医学部百年記念館地点で確認された暗渠分布図	16
		図11	医学部百年記念館地点セクション図	17
		図12	医学部百年記念館地点基本層序2層の遺構外出土器実測図及び拓影図	18
		図13	医学部百年記念館地点基本層序3層で確認した遺構の分布図	19
		図14	医学部百年記念館地点DB01, DB02, DB03の平面図及びセクション図	21
		図15	医学部百年記念館地点第1号土器片集中箇所～第3号土器片集中箇所の平面図	21
		図16	医学部百年記念館地点の第1号、第2号土器片集中箇所出土器実測図及び拓影図	22
		図17	医学部百年記念館地点の第3号土器片集中箇所出土器実測図及び拓影図	23
		図18	医学部百年記念館地点基本層序3層の遺構外出土器実測図及び拓影図1)	24
		図19	医学部百年記念館地点基本層序3層の遺構外出土器実測図及び拓影図2)	27
		図20	医学部百年記念館地点基本層序3層の遺構外出土器実測図及び拓影図3)	28
		図21	医学部百年記念館地点基本層序3層で確認した接合資料分布図1)	29
		図22	医学部百年記念館地点基本層序3層で確認した接合資料分布図2)	29
		図23	医学部百年記念館地点基本層序3層で確認した接合資料分布図3)	30
		図24	医学部百年記念館地点基本層序3層で確認した接合資料分布図4)	30
		図25	医学部百年記念館地点基本層序4層で確認した遺構の分布図	31
		図26	医学部百年記念館地点第4号土器片集中箇所の平面図	32
		図27	医学部百年記念館地点第1号礫集中箇所～第3号礫集中箇所の平面図	32
		図28	医学部百年記念館地点の第4号土器片集中箇所出土器実測図及び拓影図	33
《本文目次》				
第1部 調査報告	9			
第1章 北大構内の遺跡と調査の概要	10			
I-1. 地理的環境と遺跡の立地	10			
I-2. 2017年度の調査概要	13			
第2章 発掘調査の成果	15			
II-1. K39 遺跡医学部百年記念館地点の発掘調査	15			
1. 調査地点の位置と周辺での過去の調査	15			
2. 調査の概要	16			
3. 層序	20			
4. 遺構と遺物	20			
5. 自然科学分析	39			
6. 小結	42			
II-2. K39 遺跡中央キャンパス教育学部北地点の計画調査	49			
1. 調査の目的	49			
2. 調査の方法	51			
3. 層序と古地形	51			
4. 遺構と遺物	58			
5. 自然科学分析	58			
6. まとめ	65			
第3章 確認・立会調査の成果	66			
III-1. 確認・立会調査で確認された層序	66			
III-2. 2017年度確認調査・立会調査の結果	67			
第2部 平成29年度年次事業報告	81			
2-1. 調査活動	82			
2-2. 教育普及活動	82			
2-3. 統計・資料	85			
参考・引用文献	89			
《図目次》				
図1	図面記述凡例図	4		
図2	遺物記号凡例図	4		
図3	器種ごとの部位名称	4		
図4	石器及び礫の計測位置図	4		
図5	北大構内の遺跡と2017年度調査実施地点	11		

図29	医学部百年記念館地点基本層序4層の遺構外出土石器実測図及び拓影図	34
図30	医学部百年記念館地点基本層序4層で確認した接合資料分布図1)	35
図31	医学部百年記念館地点基本層序4層で確認した接合資料分布図2)	35
図32	医学部百年記念館地点基本層序4層の遺構外出土石器実測図	36
図33	医学部百年記念館地点基本層序5層で確認した遺構の分布図	37
図34	医学部百年記念館地点の第1号木杭址セクション図	38
図35	医学部百年記念館地点第1号木杭址出土の杭の実測図	38
図36	医学部百年記念館地点基本層序5層の遺構外出土石器実測図	39
図37	医学部百年記念館地点の暦年較正結果	42
図38	中央キャンパス教育学部北地点試掘抗位置	49
図39	中央キャンパス教育学部北地点と周辺の地点	50
図40	中央キャンパス教育学部北地点土層断面図1)	52
図41	中央キャンパス教育学部北地点土層断面図2)	53
図42	中央キャンパス教育学部北地点土層断面図3)	54
図43	中央キャンパス教育学部北地点出土の石器実測図及び拓影図	58
図44	中央キャンパス教育学部北地点の暦年較正結果	59
図45	構内確認・立会調査セクション図	66
図46	構内確認・立会調査位置図1)	68
図47	構内確認・立会調査位置図2)	68
図48	構内確認・立会調査位置図3)	69
図49	福利厚生施設地点試掘抗位置	70
図50	福利厚生施設地点土層断面図	71
図51	福利厚生施設地点出土の石器実測図及び拓影図	73
図52	福利厚生施設地点出土の石器実測図	74
図53	北大札幌キャンパス内のゾーン区分	83

〔表目次〕

表1	2017年度実施調査一覧	13
表2	医学部百年記念館地点の基本層序観察表	18
表3	医学部百年記念館地点基本層序2層の遺構外出土石器観察表	18
表4	医学部百年記念館地点DB01-DB03の土層観察表	21
表5	医学部百年記念館地点基本層序3層の土器片集中箇所出土石器観察表	25
表6	医学部百年記念館地点基本層序3層の遺構外出土石器観察表	25

表7	医学部百年記念館地点基本層序4層の土器片集中箇所出土石器観察表	34
表8	医学部百年記念館地点基本層序4層の遺構外出土石器観察表	34
表9	医学部百年記念館地点基本層序4層の遺構外出土石器観察表	36
表10	医学部百年記念館地点第1号木杭址の土層観察表	38
表11	医学部百年記念館地点第1号木杭址出土の杭の観察表	39
表12	医学部百年記念館地点基本層序5層の遺構外出土石器観察表	39
表13	医学部百年記念館地点の測定試料および処理	41
表14	医学部百年記念館地点の放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	41
表15	中央キャンパス教育学部北地点土層観察表1)	55
表16	中央キャンパス教育学部北地点土層観察表2)	56
表17	中央キャンパス教育学部北地点土層観察表3)	57
表18	中央キャンパス教育学部北地点出土石器観察表	58
表19	中央キャンパス教育学部北地点の放射性炭素年代測定結果(δ ¹³ C補正值)	59
表20	中央キャンパス教育学部北地点の放射性炭素年代測定結果(δ ¹³ C未補正值、暦年較正用 ¹³ C年代、較正年代)	59
表21	北大構内確認調査層序観察表	66
表22	福利厚生施設地点土層観察表1)	72
表23	福利厚生施設地点土層観察表2)	73
表24	福利厚生施設地点出土石器観察表	73
表25	福利厚生施設地点出土石器観察表	75
表26	常設展示資料一覧表	82
表27	月別開館日数及び入館者数	85
表28	受領刊行物一覧表1)	86
表29	受領刊行物一覧表2)	87
表30	受領刊行物一覧表3)	88

〔写真目次〕

写真1	医学部百年記念館地点木杭址出土の木質遺物(No.416)の木口切片	40
写真2	医学部百年記念館地点の出土遺物1)	44
写真3	医学部百年記念館地点の出土遺物2)	45
写真4	医学部百年記念館地点の出土遺物3)	46
写真5	医学部百年記念館地点の出土遺物4)	47
写真6	医学部百年記念館地点の調査	48
写真7	中央キャンパス教育学部北地点出土の土器	58
写真8	中央キャンパス教育学部北地点の調査1)	61
写真9	中央キャンパス教育学部北地点の調査2)	62

写真10	中央キャンパス教育学部北地点の調査(3)	63
写真11	中央キャンパス教育学部北地点の調査(4)	64
写真12	福利厚生施設地点の調査(1)	76
写真13	福利厚生施設地点の調査(2)	77
写真14	福利厚生施設地点出土遺物	78
写真15	2017年度調査の状況	79
写真16	第8回企画展示の様子	82
写真17	第17回トレイルウォークの様子	84
写真18	第10回調査成果報告会の様子	84

第 1 部 調查報告

第 I 章 北大構内の遺跡と調査の概要

I-1 地理的環境と遺跡の立地

北海道大学の札幌キャンパスは、札幌市域の北部にある。札幌市域の地形は、第一に新第三紀から第四紀初頭に形成された北西部から南西部にかけての山地、第二に支笏火砕流堆積物からなる東部の丘陵や台地、第三に後期更新世から完新世中頃にかけて、豊平川や発寒川によって形成された扇状地や河岸段丘、第四に北部の沖積低地に大きく分けられる。

北大札幌キャンパスは、豊平川によって形成された豊平川扇状地から沖積低地への移行区域にある。平岸面と札幌面に分かれる豊平川扇状地において、北大札幌キャンパスの南側はおおよそ 3500 年前頃に形成されたとみられる(大丸 1989)札幌面の末端に位置する。キャンパス南側の人文・社会科学総合教育研究棟地点(小杉編 2004・2005)では、標高 10.5 m 前後から札幌面を形成したと考えられる扇状地の堆積物が確認されている。一方キャンパスの北側では、低温科学研究所周辺で掘削されたボーリング・コアのデータをもとに、札幌面の堆積物は確認されていない(嵯峨山他 2007)。縄縄文化あるいはそれ以前に相当する段階に関しては、地形面の発達や時期ごとの堆積環境において、キャンパスの南側と北側には違いがあった可能性に注意しなければならない。

扇状地末端には湧水地点がかつては多くみられた。北大札幌キャンパスの南側に位置する植物園や清華亭、知事公館周辺にも湧水地点があったことがわかっている。こうした湧水地点からの流水を集めて形成された河川が、構内を南から北へむけていくつかが蛇行しながら流れていた。サクシュコトニ川、サクシュコトニ川の支流、セロンベツ川として区別し、知られている河川がそうしたものである。

それらの河川位置に関しては、古地図、等高線図、航空写真から理解できるほか、調査の過程で確認した埋没河道によっても検証できる。キャンパス内を流れていた河川は、流路の位置をときに大きく変えながら、縄縄文化や擦文文化に相当する時期には氾濫を繰り返していたようである。氾濫によって供給された堆積物やその侵

食によって、河川周辺の微地形面(河谷、微高地、後背湿地など)が形成されていったと考えられる。当該期の遺跡は、北大構内においては河川沿いの微高地から検出される場合が最も多いが、河谷内から確認される場合もある。

北大札幌キャンパスの全域は、植物園が「C 44 遺跡」、第二農場の一部が「K 435 遺跡」、それ以外の区域が「K 39 遺跡」として、埋蔵文化財包蔵地に登録されている。しかし、それらは実質的には「遺跡群」と呼べる。遺跡の集合と考えられる。本報告では、2002 年に刊行された報告(小杉編 2002)に準じ、便宜的に発掘調査がなされて区域ごとに「○遺跡○地点」と呼称して記載を進めていく。それぞれの地点の名称は、調査の原因となった工事に関連付けて設定することとした。

北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、1994 年に実施した大学構内のやや南側に位置するゲスト・ハウス地点での発掘調査において、北大構内での標準層序の統一化を検討した。その結果、層序を大きく 9 つに区分することが試案として提示された(吉崎編 1995)。また、毎回実施される試掘調査による堆積層のデータから、北大構内の堆積層位が大きく 4 つにまとまること(サクシュコトニ川の上流部左岸：大野池周辺、サクシュコトニ川上流部右岸：学術交流会館周辺、サクシュコトニ川の中流部右岸：工学部北部～低温科学研究所、サクシュコトニ川の下流部左岸もしくはセロンベツ川下流部の両岸：第一農場北部)が示されている(小杉編 2002)。

現在も、標準層序を念頭に置きながら、地域的な変異を考慮した堆積層位の体系的な理解を北大構内で進めていることから、発掘調査や試掘調査で確認された層序の対比をおこなう場合のために、以下に標準層序の概要を示す。

0 層：客土、盛土

I 層：黒色土(旧表土)

II 層：灰色シルト

III 層：白色粘土と有機物の多い黒色土の互層

IV 層：灰褐色シルト層・粘土層

V 層：黒色と灰色の粘土の互層

VI 層：灰褐色シルト層と粘土層

VII 層：青色粘土層

VIII 層：砂利、砂、シルトの互層

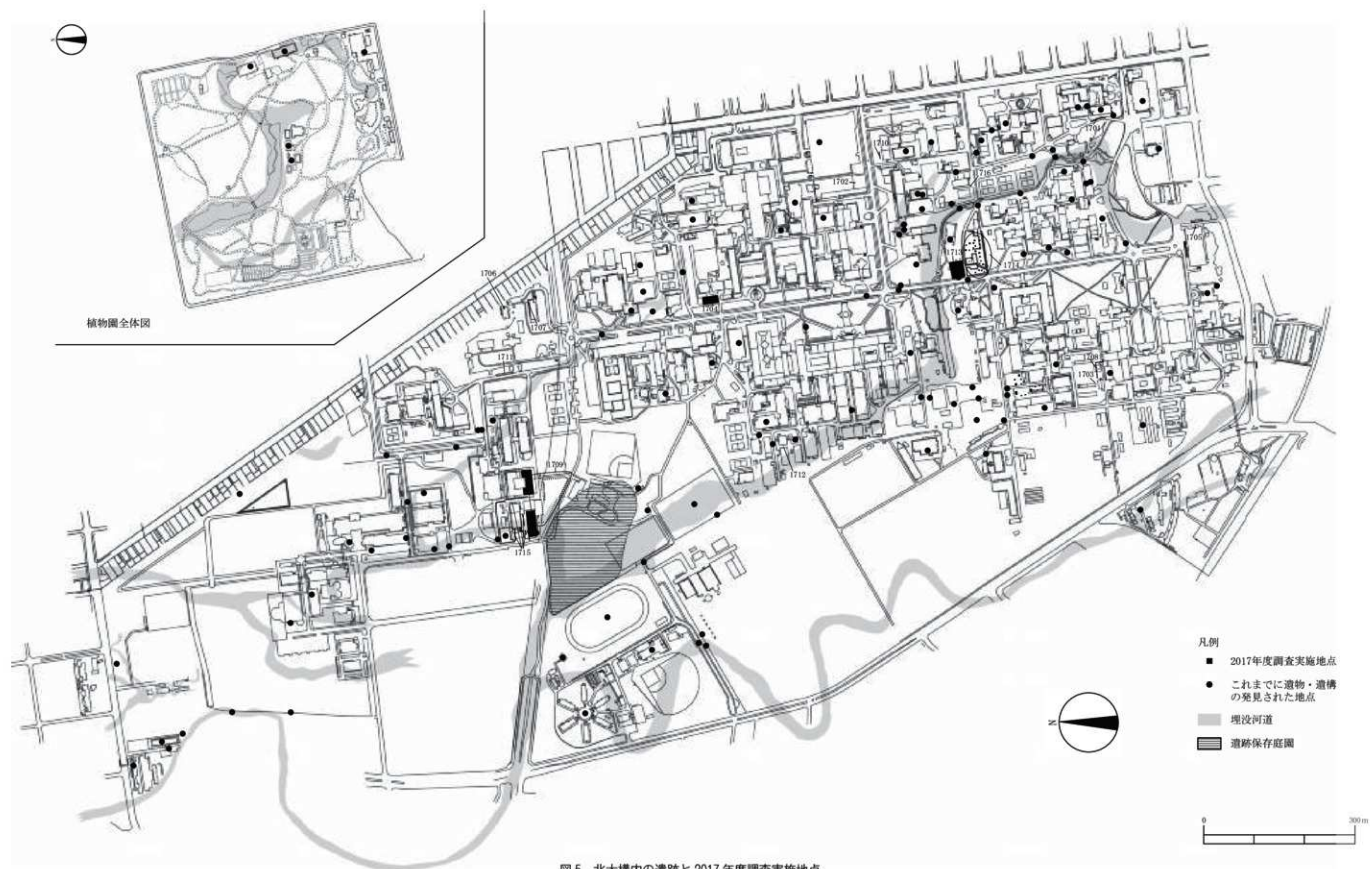


図5 北大構内の遺跡と2017年度調査実施地点

I-2 2017年度の調査概要

2017年度、北海道大学構内では本発掘調査1件、確認調査2件、計画調査1件、立会調査10件、慎重工事3件を実施した(表1、図5)。調査件数に関しては工事名称から算出しているが、一工事案件に確認調査と発掘調査の両方がある場合や、確認調査と立会調査の両者を実施した場合には、発掘調査、試掘調査、立会調査の件数に振り分けて算定している。

本発掘調査は、医学部百年記念館新営工事に伴う箇所(K39遺跡医学部百年記念館地点:調査番号1704)でおこなった。

学術研究を目的とした計画(確認)調査として、2017年度においては中央キャンパス教育学部北地点(調査番号1714)で調査を実施した。

確認調査を実施することによって、2箇所の工事予定地で遺構・遺物が確認された。それらの内、医学部百年記念館新営工事に伴う箇所(K39遺跡医学部百年記念館地点:調査番号1704)は、上述のように、2017年度に発掘調査を実施した。それら以外の福利厚生施設新営工事予定地(調査番号1713)に関しては、確認調査後に協議を重ね、工事に際しては遺物包含層(地表下約2.7m)に到達しない地表下約1mまでの掘削にとどまるとい

う変更がなされた。掘削の深度と遺物包含層の間に約1.7mの厚さの保護層が確保できることとなったため、本発掘調査は実施されずに現状のまま保存されることとなった。

第1部調査報告では、第2章として2017年度に実施した本発掘調査1件(K39遺跡医学部百年記念館地点)の成果を報告する。加えて、計画調査1件(K39遺跡中央キャンパス教育学部北地点)の成果も報告する。第3章では表1で示した調査番号に基づき、確認調査、立会調査の概要をまとめ、報告する。

なお、本発掘調査が実施された箇所に関しては、北海道大学札幌キャンパス内全体を対象に設定された5×5mを基本グリッドとする方眼を用いて各種の記録をおこなっている(図6、7参照)。この仮想原点の設定は、公共座標に対応させておこなった。北緯44°00'00"、東経142°15'00"の地点を基準点とし、X軸方向に-103307.649m、Y軸方向に-74767.738mの地点を方眼の仮想原点としている。Y軸の方位は、N10°55'33"Wである。Y軸とX軸との関係は数学系座標と同じであり、それぞれのグリッドには算用数字で記号を付して表記する。上記のことから、植物園の範囲は仮想原点よりも南に位置する。植物園内での2017年度の調査を実施しなかったため、図7では示していないが、植物園の範囲はY軸方向の数値がマイナス表記となる。

(高倉)

表1 2017年度実施調査一覧

調査番号	調査日	工事名称	調査の種類	工事面積(m ²)	調査面積(m ²)	文化	遺構・遺物
1701	17.5.10~5.31 (延べ3日)	事務局本館棟改修D工事	立会	13.1	13.1		遺構・遺物なし
1702	17.5.17	大学病院棟改修工事	立会	0.8	0.8		遺構・遺物なし
1703	17.5.26~5.30 (延べ5日)	農学部圃場給水管修理工事	立会	0.45	0.45		遺構・遺物なし
1704	17.5.29~6.16 8/7~10/20	医学部百年記念館新営工事	発掘調査・ 確認調査	1253	743~60	雑文	地上積集中2基、土器集中5基、礎集中3基、木柱、土器、須臾器、礎
1705	17.7.2	タワーク会館屋外排水管修理工事	慎重工事	2.8	2.8		-
1706	17.7.11	北大病院保育部ボンプ給水管改修工事	立会	3.5	3.5		遺構・遺物なし
1707	17.7.21	遠友学生会館外給水管修理工事	慎重工事	0.8	0.8		-
1708	17.7.24~7.28 (延べ4日)	農学部圃場給水管更新工事	立会	44	44		遺構・遺物なし
1709	17.8.1~8.3	観光学部Vドック新設工事	立会	25.8	10.5		遺構・遺物なし
1710	17.8.10	保健学研究所D棟排水管修理工事	慎重工事	14	14		-
1711	17.10.3~10.5	モデルバーンフェンス改修工事	立会	3	3		遺構・遺物なし
1712	17.10.4	工学部屋外ガス管修理工事	立会	1	1		遺構・遺物なし
1713	17.10.11~10.23	福利厚生施設新営工事	確認調査	-	54	統編文	土器、石製、礎
1714	17.10.19~11.15	中央キャンパス教育学部北地点	計画調査 (確認調査)	-	108	縄文晩期一統編文	型瓦住居1基、土器
1715	17.10.30~18.2.5 (延べ4日)	観光学部動物舎改修工事	立会	58	33		遺構・遺物なし
1716	17.12.11	電電所引き込みケーブル点検業務	立会	4	4		遺構・遺物なし

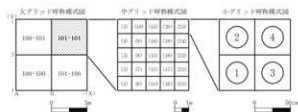


図6 グリッド呼称図

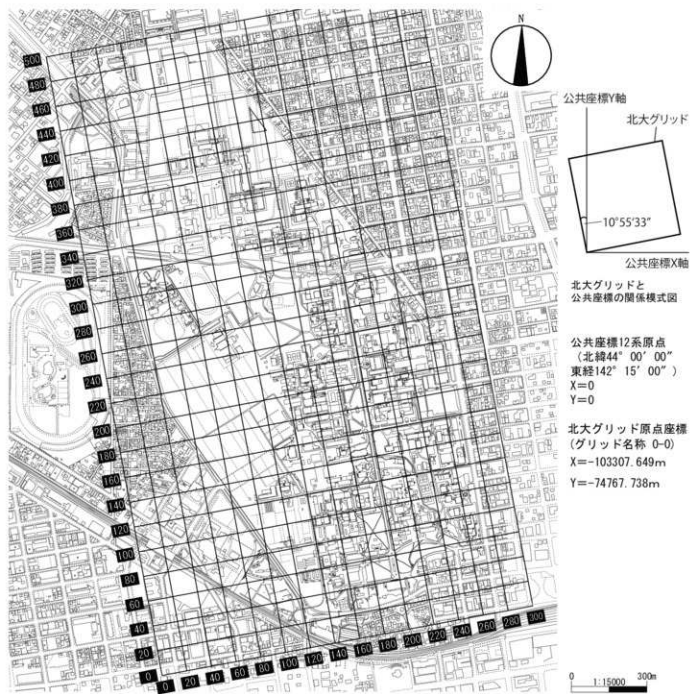


図7 大学構内グリッド配置図 (1マス 100m)

第II章 発掘調査の成果

II-1 K39 遺跡医学部百年記念館 地点の発掘調査

1. 調査地点の位置と周辺での過去の調査

本地点は、北海道大学構内の中央部、保健センターの南側約50m、北緯43度4分39秒周辺、東経141度20

分20秒に位置する。本地点の遺構・遺物包含層の標高は、約12.0m～約12.2mである(図8)。

本地点の周辺では、縄文文化、統縄文期の遺構・遺物の発見された地点が存在する(図8)。本地点の西方向約100mでは、縄文文化の遺物が発見されたK39遺跡教養部教養食堂増築地点がある(吉崎1990)。遺構は確認されなかったが、縄文土器片、縄が計22点発見された。本地点の北西方向約200mでは、K39遺跡北西地区ギガビット・ネットワーク配線地点がある(小杉ほか

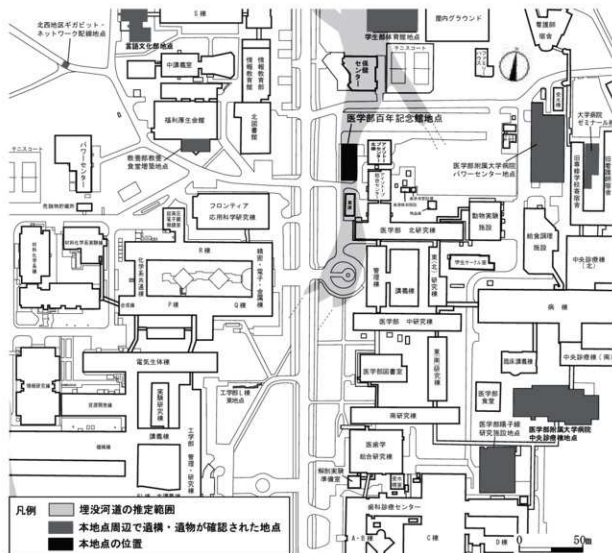


図8 医学部百年記念館地点の位置と周辺の地点

2003)。捺文文化の竪穴住居址1基が確認された。本地点の南西方向約170mでは、竪穴住居址の一部が地層断面で確認された工学部L棟東地点がある(小杉ほか2003)。本地点の南東方向約200mでは、K39遺跡医学部陽子線研究施設地点がある(小杉ほか2013)。いわゆる北海道式古墳が発見され、集落址から離れた墓域の広がりか推測される。捺文文化より古い時期では、本地点の北方向約80mでK39遺跡学生部体育館地点が存在する(吉崎1988)。統縄文期後半の屋外炉址が発見された。

(守屋)

2. 調査の概要

平成28年度、医学部アイストープ総合センター西側の駐車場周辺で医学部創立百年を記念する建物の建築工事が計画され、協議を行った。工事予定地周辺では、捺文文化、統縄文期の遺構・遺物が確認された地点があり、本工事予定地の掘削深度が周辺地点の遺構・遺物包含層に達する内容であった。北海道大学埋蔵文化財調査センター運営委員会専門部会では、本工事予定地内で遺構・遺物包含層が存在する可能性が高いと判断して、工事予定地の一部を対象とした確認調査が必要との所見が決議された。それを受けて、本埋蔵文化財調査センターで事前の調査を実施した。

確認調査は、平成29年5月29日～平成29年6月16日の間、確認坑16基(TP01～TP16)を設定して実施した(図9)。調査では、旧地形、地層堆積状態、遺構・遺物の有無を精査した結果、窪地状の旧地形内で、地層が南側から北側に向かって傾斜していること、TP03の黒色粘土層、TP11の灰色粘土質シルト層から捺文土器片23点、須恵器片1点が確認された。遺物包含層は、建物の建築が予定されている範囲で遺物密度が高い状態と推測できた。

確認調査の結果に基づいて、北海道大学埋蔵文化財調査センター運営委員会専門部会が取り扱いを検討した結果、遺物の密度が高いと推測される建物建設予定地(図9: TP01～TP03, TP08, TP11～TP15周辺)では、工事予定深度が遺物包含層に達することから、工事予定位置が変更されない限り発掘調査が必要との所見が示され、建物周辺の電力・通信・給水管敷設置予定地(図9: TP04～TP07, TP10, TP16周辺)では、工事予定深度が遺物包含層に達しないことから、立会調査が必要との所見が示された。

工事関係者がそれらの所見を受けて、工事計画の再検討を行ったが、建物建築などの工事予定地の位置および

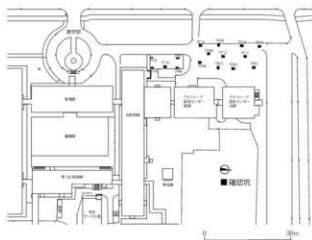


図9 医学部百年記念館地点の確認坑位置図

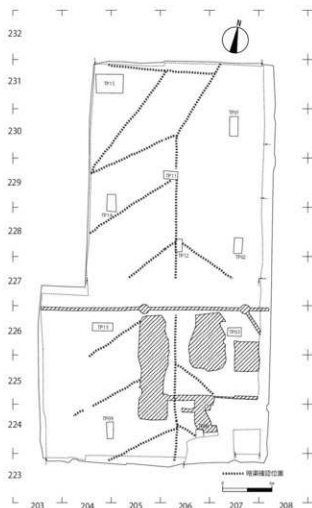


図10 医学部百年記念館地点で確認された暗渠分布図

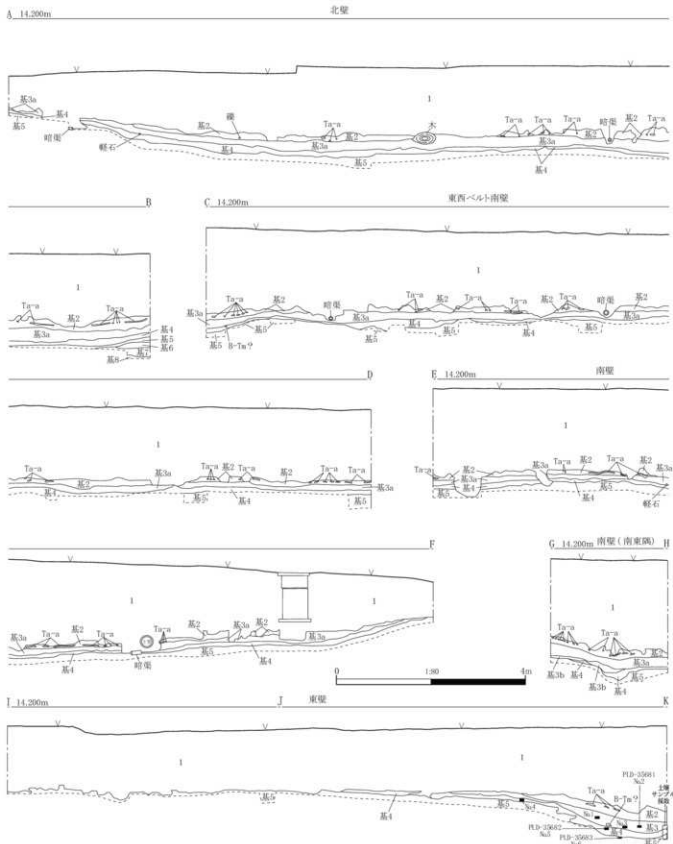


図 11 医学部百年記念館地点セクション図

表2 医学部百年記念館地点の基本層序観察表

遺物出土 有無	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物、備考など	
	1	寄土					
有	2	10 YR 3/2	黒褐色	粘土質シルト	中	中	Ta-aを含む。
有	3a	10 YR 3/3	暗褐色	粘土質シルト	中	やや強	有機物を含む。
	3b	10 YR 5/1	褐灰色	粘土質シルト	中	中	砂、パミス含む。まだら状。
有	4	10 YR 6/2	灰黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	
有	5	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	中	やや強	
	6	10 YR 6/4	にぶい黄褐色	粘土	強	やや弱	
	7	10 YR 6/6	明黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	
	8	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	粘土	やや強	中	

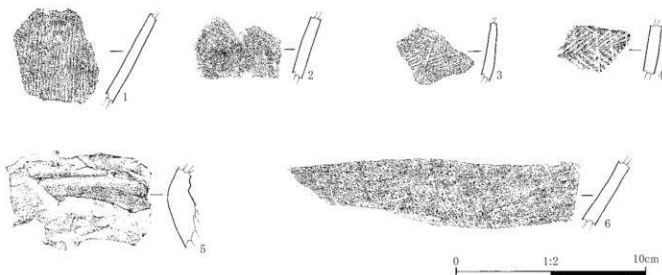


図12 医学部百年記念館地点基本層序2層の遺構外出土土器実測図及び拓影図

表3 医学部百年記念館地点基本層序2層の遺構外出土土器観察表

図録 番号	接合 番号	器種	部位	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	器面調整		時期	層位	遺物番号 (出土グリット)	写真 番号	備考
								外面	内面					
12-1	—	壺	胴部	—	—	—	17.72	押痕(縦位)	ミガキ(縦位)	推文	2層	(204-230) 93	2-1	
12-2	—	壺	胴部	—	—	—	10.85	磨滅	磨滅	推文	2層	(205-229) 95	2-2	
12-3	—	壺	胴部	—	—	—	6.37	押痕(斜位)	押痕(横位)	推文	2層	(205-228) 97	2-3	
12-4	—	壺	胴部	—	—	—	8.47	沈線文(矢羽根状)	指圧痕	推文	2層	(205-228) 96	2-4	
12-5	—	須恵器 長頸壺	胴部	—	—	—	23.17	沈線文(横位)	回転ナデ(横位)	推文	2層	(205-230) 98	2-5	
12-6	—	須恵器 長頸壺	胴部	—	—	—	63.76	ケズリ(斜位)	回転ナデ(横位)	推文	2層	(205-229) 94	2-6	

範囲は変更できないとの結論であった。そのため、746 m²の建物建設予定地に対して、工事実施前の本発掘調査を平成29年8月7日～平成29年10月20日まで行うこととなった。

本発掘調査では、構内全域を経緯に区分したメッシュに沿って基本グリットを調査範囲内で設定した。基本グ

リットは5m四方の範囲を大グリット、それを25分割した1m四方を中グリット、中グリットを4分割した小グリットを設けた(基準点はグリットの左下である)。

本発掘調査では、重機によって調査対象範囲内の表土を東側から西側に向かって取り除いた後、人力によって掘削をおこなった。調査範囲内では、幅約0.7m～約1

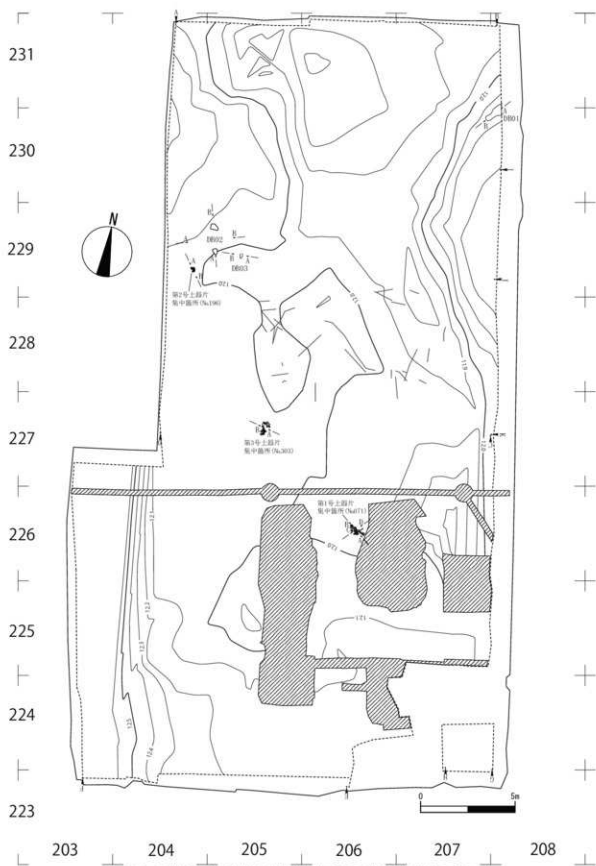


図13 医学部百年記念館地点基本層序3層で確認した遺構の分布図

mのベルトおよびベルトに沿ったトレンチを設定して堆積土を掘削し、また、調査対象範囲と調査対象外の壁際に沿って幅0.6m~1mのトレンチを設定して、速やかな土層堆積順序の把握をおこなった。確認した遺構・遺物は発見状態を観察、精査し、その結果を写真撮影して、測量基準点と光波測距儀によって座標をとらえて、分布状態や位置を記録した。調査範囲や各遺構の土層堆積は、写真撮影を行った後、主に基準標高を水糸で設定して、手取りで測り、断面図を作成した。遺構・遺物を含む地層ごとに出土状態の調査や記録をおこなった後、調査範囲の壁を養生して埋め戻しを行い、現地調査を終了し、工事関係者に現地を引き渡した。

調査の結果、4つの地層から、遺構として焼土粒集中箇所3基、土器片集中箇所4基、礫集中箇所3基、木杭1基を確認した。また、遺物として、土器片571点(縄文土器1点、擦文土器567点、時期不明3点)、石器4点、礫540点、土製品1点、木杭1点の総計1117点を確認した。

上記以外では、窪地に設置された暗渠を発見した(図10)。暗渠は基本層序2層を掘削していたことから、近現代のものだと判断した。長さ約30cmの素焼の土管を葉脈状に連結して、地中に埋設されていた。

(守屋)

3. 層序

本地点での地層は、確認をおこなった範囲で、8枚に区分され、基本層序として算用数字で示した。上位から1層~8層と表記する(図11,表2)。

1層は客土である。2層は黒褐色の粘土質シルト層で、堆積幅が約15cmの箇所がみられた。幅が厚いところでは、樽前山a火山灰を地層中位で確認した。2層からは擦文土器片を発見した。3層は3a層、3b層に区分できた。3a層は暗褐色の粘土質シルト層で、地層中に木の枝や根などといった有機物が存在した。3b層は調査範囲の南側でみられた(セクションG-H)。部分的な堆積および分布状態と推測する。3層の内、遺構・遺物が発見されたのは主に3a層であった。3a層からは、焼土粒集中箇所、土器片集中箇所、擦文土器片、石器が確認された。4層は灰黄褐色の粘土質シルト層である。4層からは、土器片集中箇所、礫集中箇所、擦文土器片、磨石が発見された。5層はぶい黄褐色の砂質シルト層である。砂質の度合いは均等ではなく、著しく砂に近い部分のみられた。5層からは、木杭1基、時期が特定できなかった土器片が確認された。6層はぶい黄褐色の粘土層である。7層は明黄褐色の粘土質シルト層である。8層は

ぶい黄褐色の粘土層である。6層~8層では、確認調査時および本発掘調査時に、旧地形を推定するための堆積状態が確認できたが、遺構・遺物は発見されなかった。

基本層序の堆積状態を把握することによって、調査範囲内に窪地があったこと、窪地に隣接した高まりがあったことを捉えた。基本層序の内、2層~4層は調査範囲の南北方向で帯状に分布し、重層していた。精査した結果、東西方向で約20m幅の窪地と明らかにできた。調査範囲の東側の一部および西側の一部では、地形の高まりが窪地に沿ってみられた。高まりでは、2層~4層の堆積がみられず、客土の直下で5層が確認できる状態であった。本来は高まりまで2層~4層が堆積していたが、近代の建物建設の際に実施された地形改変のため、それらが失われてしまったと推定した。

以下では、基本層序ごとに分けて、遺構・遺物の内容を説明する。

(守屋)

4. 遺構と遺物

(1) 2層から発見された遺構と遺物

2層では遺構は確認できなかったが、総数9点の遺物が発見された。内訳は擦文土器片5点(47.69g:寛5点)、須恵器片2点(109.09g:長頸壺2点)、礫2点(244.86g:安山岩2点)である。図12で主な資料を図示するとともに、表3で特徴をまとめた。

図12:1~4は壺の胴部ととらえられた擦文土器片である。1では、外面縦位に擦痕がみられ、内面では縦位のミガキが観察できた。胎土に細かい雲母片が存在する。2では、表内面が摩滅していた。3では、外面で擦痕が斜位、内面で横位の擦痕がみられた。4では、外面で沈線文が矢羽根状に施され、内面では指痕が観察できた。図12:5、6は須恵器の長頸壺片である。5は、頸部片で、外面で横位の沈線文、内面では回転ナデが横位に施されている。6は、胴部片で、外面でケズリが斜位に施され、内面で回転ナデが横位に施されている。

(守屋)

(2) 3層から発見された遺構と遺物

A. 遺構

基本層序3層から確認された遺構は、焼土粒集中箇所3基、土器片集中箇所3基である。以下で説明する。

(a) 焼土粒集中箇所

第1号焼土粒集中箇所(DB01と表記)は207-230グリット、基本層序3層上面で確認した。207-228~230グリット周辺に存在した高まりの傾斜地に位置する。全体の約半分は調査範囲外に広がっている。確認できた範囲

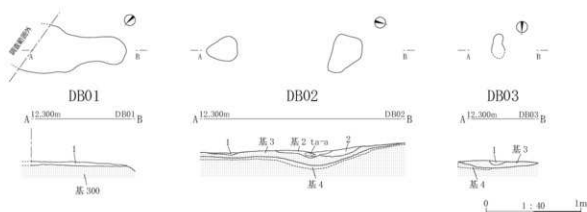


図14 医学部百年記念館地点DB01, DB02, DB03の平面図及びセクション図

表4 医学部百年記念館地点DB01～DB03の土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
DB01	1	7.5 YR 6/4	にぶい橙色	粘土質シルト	強	やや弱	炭化した木材を含む。炭化物を含む。
	基3a	10 YR 2/1	黒色	粘土質シルト	中	中	
DB02	1	2.5 YR 6/1	赤灰色	粘土質シルト	中	中	Ta-a 含む。 有機物含む。
	2	2.5 YR 3/2	暗赤褐色	粘土質シルト	中	中	
	基2	10 YR 2/2	黒褐色	粘土質シルト	中	やや弱	
	基3a	10 YR 2/3	黒褐色	粘土質シルト	中	中	
	基4	10 YR 5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	中	中	
DB03	1	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土質シルト	やや弱	やや弱	Ta-a 含む。
	基2	10 YR 3/1	黒褐色	粘土質シルト	中	中	
	基3a	10 YR 2/2	黒褐色	粘土質シルト	中	中	
	基4	10 YR 5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	

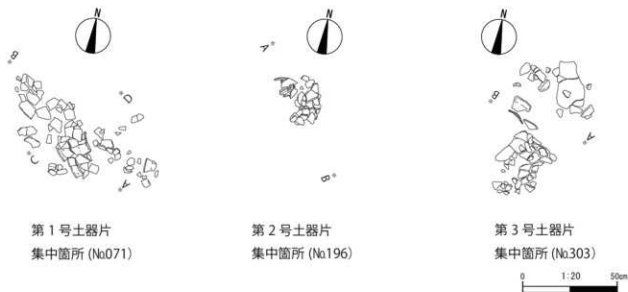


図15 医学部百年記念館地点第1号土器片集中箇所～第3号土器片集中箇所の平面図



図16 医学部百年記念館地点の第1号、第2号土器片集中箇所出土土器実測図及び拓影図



図17 医学部百年記念館地点の第3号土器片集中箇所出土土器実測図及び拓影図



図18 医学部百年記念館地点基本層序3層の遺構外出土土器実測図及び拓影図(1)

表5 医学部百年記念館地点基本層序3層の土器片集中箇所出土土器観察表

図録番号	組合番号	器種	部位	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	器面調整		時期	層位	遺物番号 (出土グリッド)	写真番号	備考
								外面	内面					
16-1	19	甕	口縁部 一割部	(28.6)	29.0	—	1349.63	磨滅(縦)、補修孔 (貫通×3)、黒色 処理(口縁部)、保 付着	黒色処理、保付着	弥文	3a層	(206-226) 09, 84, 71a, b, d-t, v-z, aa-vv, yy, zz, aaa, ccc-eee, ggg, iii, kkkk	2-7	第1号土器片集中
16-2	49	小型甕	口縁部 一割部	(17.0)	18.0	—	639.93	沈線文(横)		弥文	3a層	(204-229) 196a-m	2-8	第2号土器片集中
17-1	11	甕	口縁部 一底部	36.8	33.4	8.4	2189.87	沈線文(縦歯状)、 十字目、保付着	保付着	弥文	3a層	(205-227) 293, 294a, b, 295-301, 303a-d	2-9	第3号土器片集中

表6 医学部百年記念館地点基本層序3層の遺構外出土土器観察表

図録番号	組合番号	器種	部位	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	器面調整		時期	層位	遺物番号 (出土グリッド)	写真番号	備考
								外面	内面					
18-1	34	甕	口縁部 一割部	—	23.0	—	143.47	幾何学的沈線文、 矢羽根状の割み目	口縁部ミガキ(横)	弥文	3a層	(207-227) 143, 145, 185-190, 199, 253, 267, 270, 275, 277, 278, 280, 284	3-1	
18-2	35	甕	口縁部 一割部	—	—	—	81.17	幾何学的沈線文、 口縁部矢羽根状の 割み目	口縁部ミガキ(横)	弥文	3a層	(207-227) 129, 130, 136, 139, 141, 142, 150, 153, 213, 231, 242, 249, 251, 292	3-2	
18-3	32	甕	口縁部 一割部	—	—	—	58.07	割部幾何学的沈線 文	ミガキ(横)	弥文	3a層	(207-224) 115, 116	3-3	
18-4	25	甕	口縁部	—	—	—	43.21	凹線文3本、割み 目、穿孔あり	ミガキ(横)	弥文	3a層	(206-227) 668, 669	3-4	
18-5	13	甕	口縁部	—	—	—	17.74	沈線文、割み目	ミガキ(横)	弥文	2層 3a層	(206-224) 113 (206-224) 390	3-5	
18-6	—	甕	口縁部	—	—	—	52.22	沈線文2本	ナナ(横)	弥文	3a層	(204-230) 357	3-6	
18-7	39	甕	口縁部 一割部	—	20.0	—	145.76	沈線文3本(横)	口縁部ミガキ (横)、割部ミガキ (縦)	弥文	3a層	(207-227) 30, 119, 123, 155, 165, 216, 224, 233, 243, 244	3-7	
19-1	40	甕	口縁部 一割部	—	21.0	—	342.40	沈線文(横)、割部 ミガキ(横)	口縁部ミガキ (横)、割部ミガキ (斜)	弥文	3a層	(207-227) 124, 126, 137, 138, 151, 161, 166-170, 172, 173a-d, 1717b, 202, 209, 220, 227, 229, 256, 258, 264-266, 272-274, 283	3-8	
19-2	—	甕	口縁部	—	—	—	41.66	擦痕(斜)	擦痕(横)	弥文	3a層	(204-230) 356	3-9	
19-3	18	甕	口縁部 一割部	—	—	—	24.97	口縁部擦痕(横)、 割部擦痕(斜)	ミガキ(横)	弥文	3a層	(206-228) 405, 406	3-10	
19-4	30	甕	割部	—	—	—	43.50	擦痕(斜)	擦痕(横)	弥文	3a層	(207-225) 65, 66	3-11	
19-5	15	甕	割部	—	—	—	59.42	ミガキ(横)	ミガキ(斜)	弥文	3a層	(206-228) 464, 465	3-12	
19-6	—	甕	口縁部 一割部	—	—	—	36.84	沈線文(斜)、貼付 上に角錐形の文様	磨滅	弥文	3a層	(205-229) 351	3-13	
19-7	33	甕	割部 一底部	—	—	6.5	141.19	擦痕(斜)	ナナ(横)	弥文	3a層	(207-227) 40, 42-47, 49, 50, 131, 132, 162	3-14	
19-8	14	坏	口縁部	—	—	—	28.47	沈線文1本	ミガキ(横)	弥文	3a層	(206-228) 401, 402	4-1	
19-9	20	坏	口縁部	—	—	—	21.56	沈線文1本	磨滅	弥文	3a層	(205-229) 252, 253	4-2	
19-10	—	坏	底部	—	—	—	19.21	ミガキ(縦)、沈線 文(縦歯状)	磨滅	弥文	3a層	(207-231) 311	4-3	
20-1	24	須恵器 長頸甕	割部 一底部	—	—	12.0	328.81	回転ナナ(横・斜) クズリ(斜)		弥文	1層 3a層	(206-225) 68 (204-229) 195 (207-226) 92, 試掘-4 (207-229) 53	4-4	底面に青花文

で、全体の平面形は楕円形で、規模は長軸約1m、短軸約0.6mの規模であった。遺物はみられなかった。

第2号焼土粒集中箇所(DB02と表記)は、204-229グリットで確認した。基本層序3層を掘削している途中で、炭化物粒子の広がりが見られ、その下位で焼土粒子が散在していることを確認した。精査の途中で、地層を掘りすぎ、一部が失われた。DB02では、焼土粒集中箇所が二分割していた状態で記録をしたが、本来は繋がっていた。遺物は確認されなかった。

第3号焼土粒集中箇所(DB03と表記)は、205-229グリット、基本層序3層中で確認した。精査を実施する途中で、地層を掘りすぎて、上部が失われた可能性がある。平面形は楕円形で、規模は長軸約0.3m、短軸約0.15mであった。遺物は確認されなかった。

(b) 土器片集中箇所

第1号土器片集中箇所は、206-226グリット、基本層序3層中で確認した。203-224-227グリット周辺の高まりから東側約10mの窪地に位置する。土器片の広がり、長軸約0.9m、短軸約0.5mの楕円形状であった。土器片集中箇所の上部に位置する破片は、外面が上位にみられ、土器片集中箇所の下部の破片は、内面が上位になって確認できた。図16の1は、第1号土器片集中箇所の土器片の実測図および拓影図である。椽文土器の甕で、口縁部から胴部の破片がみられた一方、底部片は確認できなかった。外面では、ほとんどが摩滅した状態であったが、胴部下部で煤の痕跡が観察できる。内面では口縁部で横位のミガキ。胴部で縦位のミガキがみられ、黒色処理されていた。口縁部では、補修孔3箇所が存在する。図16の1は、椽文文化中期後半(上野ほか1999)に帰属すると考える。

第2号土器片集中箇所は204-229グリット、基本層序3層中で確認した。204-228-231グリット周辺に存在した高まりの傾斜地に位置する。土器片の広がり、長軸約0.3m、短軸約0.2mの楕円形状であった。図16の2は、第2号土器片集中箇所の土器片の実測図および拓影図である。椽文土器の小型甕である。口縁部の外面では、横位の沈線文が3本みられる。頸部から胴部では縦位の捺痕が施されている。内面では、焦げ痕跡が口縁部～胴部上半で観察できた。器形の特徴から椽文文化中期後半(上野ほか1999)に帰属すると考える。

第3号土器片集中箇所は205-227グリット、基本層序3層中で確認した。203-224-227グリット周辺の高まりから北東方向に約6mの窪地に位置する。土器片の広がり、長軸約0.8m、短軸約0.6mの楕円形状であった。広がり、北東側では、比較的大きい破片がみられた。

図17の1は、第3号土器片集中箇所の土器片の実測図および拓影図である。椽文土器の甕である。口縁部～底部の破片がほぼまとまって出土した。口縁部の外面では沈線文4本を横位に施文した後、矢羽根状の刻み目が列状に施されている。頸部から胴部上半では、幾何学的な沈線文様がみられる。胴部中位では、刻み目が列状に施文されている。胴部下半では斜位に施された捺痕が存在する。内面では、横位のミガキが口縁部でみられ、縦位のミガキが胴部で観察できる。外面では口縁部から胴部上半で煤痕跡がみられる一方、内面では胴部上半で焦げ痕跡が存在する。文様および器形の特徴から椽文文化中期後半(上野ほか1999)に帰属すると考える。

B. 遺物

基本層序3層における遺構外出土遺物は総数381点(14827.04g)であった。その内訳は、土器片340点(4625.96g)、石器3点(51.66g)、礫37点(10132.36g)、土製品1点(17.06g;紡錘車)である。

(a) 土器

基本層序3層の土器片は、主に椽文土器であった。基本層序3層では椽文土器片324点(甕293点、小型甕9点、坏22点)、須恵器甕6点、須恵器壺1点、須恵器長頸壺7点、椽文土器不明1点、時期不明1点が確認できた。図18～20で主な資料を図示し、表6で主な資料の特徴をまとめた。

a-1 主な土器の説明

図18:1-7、図19:1-7は、甕ととらえられる椽文土器片である。図18:1-3は口縁部片で、器形が口縁部で外側に屈曲し、胴部に幾何学的な沈線文がみられる。図18:4、5は口縁部片で、口縁部で沈線文が横位に施された後、刻み目が矢羽根状に施されている。図18:6、7は口縁部で沈線文2本～3本が横位に施文されている。図19:1は口縁部から胴部の破片である。外面では、胴部に斜位のミガキがみられる一方、内面では口縁部で横位のミガキ。胴部で斜位のミガキが顕著に観察できる。図19:2、3は口縁部片である。2では口縁部に斜位の捺痕が存在する。3では、口縁部で横位の捺痕、胴部で斜位の捺痕が観察でき、内面では横位のミガキがみられる。図19:4、5は甕の胴部片である。4では、内外面で捺痕が観察できる。5では、外面で横位のミガキ、内面で縦位のミガキがみられる。図19:6は甕の胴部である。外面では幾何学状の沈線文、粘土紐の貼り付け、貼り付け上に馬蹄形の文様が観察できる。図19:7は甕の底部である。外面では斜位の捺痕、内面では横位のナデが施されている。底面では幅約2mmの筋がみられる。製作時に利用した敷物の痕跡の可能性があり、図19:8-10は

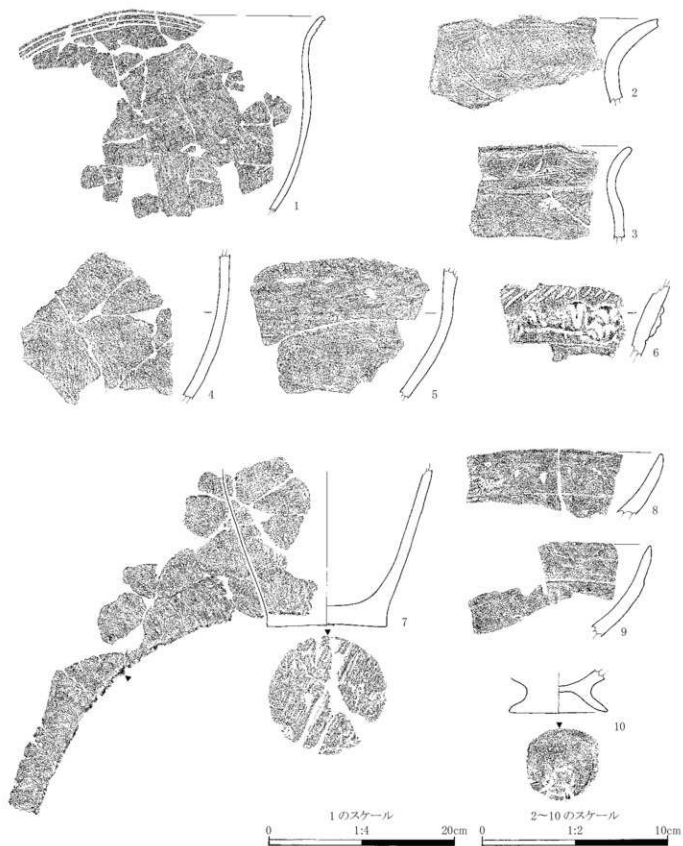


図19 医学部百年記念館地点基本層序3層の遺構外出土土器実測図及び拓影図(2)

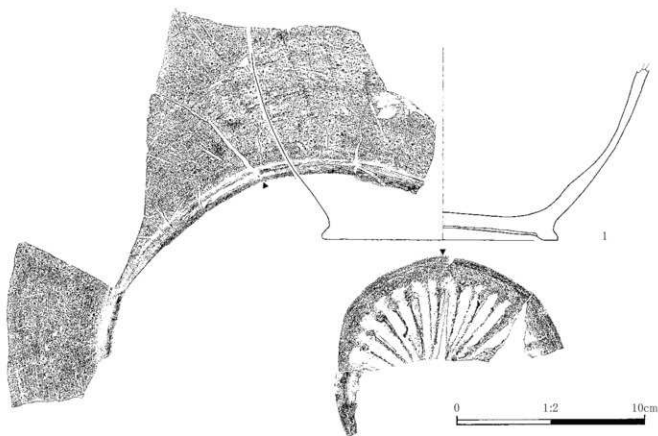


図20 医学部百年記念館地点基本層序3層の遺構外出土土器実測図及び拓影(3)

坏である。8, 9は口縁部片で、外面で沈線文1本が横位に施されている。図19:10は坏の底部である。高坏状の底部外面では、鋸歯状の沈線文がみられる。著しく細い沈線文である。図20:1は須恵器片である。胴部から底部までの形態から長頸壺と考える。外面では、斜位のケズリ、内面では回転ナデが観察できた。外面の底では高台が作り付けられている。高台を貼り付け整形した後、底面では、窠状工具による菊花文が施されている。

a-2 土器片の接合状況

基本層序3層で確認した埴文土器片、須恵器片を器種に分け、破片同士の接合状況を分析した結果を図22～図24に示した。

埴文土器片の甕では、207-227グリット周辺で発見された破片同士が接合した状態を確認した一方、205-230グリット周辺及び206-224グリット周辺で発見された破片が接合する状態がみられた。埴文土器の坏では、図24で示すように、206-228グリット周辺などで発見された破片同士が接合する状況を確認した。

埴文土器の甕、坏の破片では、近接した場所で発見された破片同士が接合する傾向があったが、須恵器の長頸

壺(図20:1)では、約20m離れた位置で発見された破片同士が接合し、一個体に復原できた(図24)。

(b) 石器

基本層序3層で確認された石器3点は、すべて黒曜石石器(剥片1点、石核2点)であった。

(c) 礫

基本層序3層で出土した礫37点は、安山岩31点、砂岩6点であった。

(d) 土製品

基本層序3層で出土した土製品1点は、紡錘車の破片であった。小破片のため、図化できなかった。

(守屋)

(3) 4層から発見された遺構と遺物

A. 遺構

基本層序4層から確認された遺構は、土器片集中箇所1基、礫集中箇所3基である(図25)。

(a) 土器片集中箇所(図26)

第4号土器片集中箇所は、205-229グリット、基本層序4層面で確認した。確認調査時のTP11で発見された土器片の一部が第4号土器片集中箇所の一部を構成し

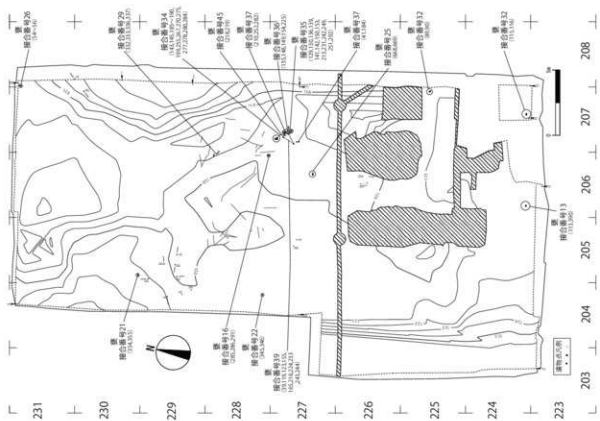


図 21 医学部百年記念館地点基本層序3層で確認した接合資料分布図(1)

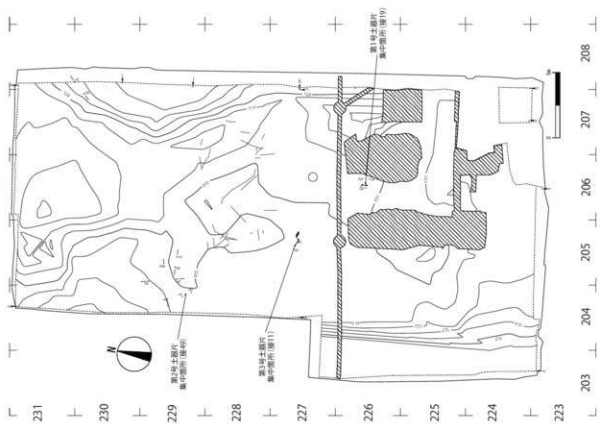


図 22 医学部百年記念館地点基本層序3層で確認した接合資料分布図(2)

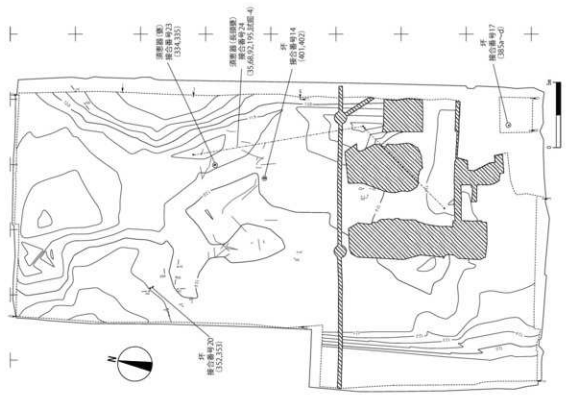


図 24 医学部百年記念館地点基本層序 3 層で確認した接合資料分布図(4)

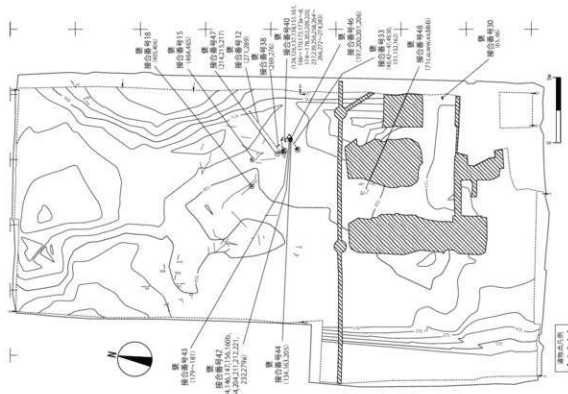


図 23 医学部百年記念館地点基本層序 3 層で確認した接合資料分布図(3)

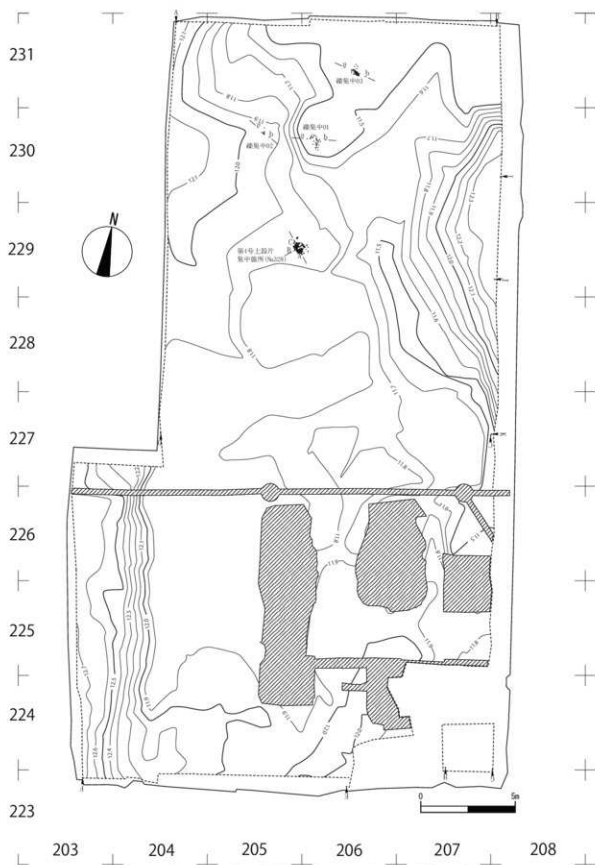
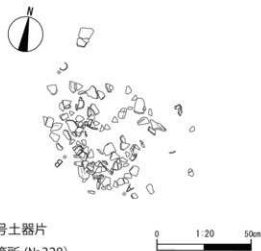


図25 医学部百年記念館地点基本層序4層で確認した遺構の分布図



第4号土器片

集中箇所 (No.328)

図26 医学部百年記念館地点第4号土器片集中箇所の平面図

ていた。204-228~231グリット周辺の高まりから南東約5mの位置でみられた傾斜地に立地する。土器片の広がり、長軸約0.8m、短軸約0.55mの楕円形状であった。約5cm四方以下の土器片が目立って、集積していた印象がある。図28:1は第4号土器片集中箇所の土器片の実測図および写影図である。破片を精査した結果、口縁部から胴部にかけて全体の約8割の形が復元できた。底部片は、第4号土器片集中箇所では確認できなかった。図28:1の外側では、口縁部で沈線文3本が横位に施文されている。胴部では斜位の擦痕が施された後、約5cmの間隔で、沈線文が2本施文されている。胴部中位では、横位に施文された沈線文1本がみられる。

胴部下半では、擦痕が斜位に施されている。内面では、口縁部で横位のミガキが観察できる一方、胴部で斜位のミガキが施されている。外面の胴部上半では、煤痕跡が観察される。図28:1は、器形および文様の特徴から擦文文化中期後中頃以降(上野ほか1999)に帰属すると考える。

(b) 礫集中箇所

礫集中箇所3基は、拳大から人頭大の礫が窪地内で集積して発見された状態をとらえ、遺構とした。北大構内の遺跡では、拳大および人頭大の礫が地層中に堆積している場合、人為的な痕跡とこれまで判断してきた。それは、サクシュコトニ川の流水によって運ばれた堆積物が、シルト、砂、約2cmの礫で構成される傾向を把握してきたからである。今回、礫集中箇所と判断した遺構では、大型の礫が集中していた一方、精査の途中で基本層序5層より下位の地層にまで礫分布が広がっている場合があった。人為的に形成されたかと判断できる面と自然現象として理解すべき点が混在した状態であったため、遺構と判断することが難しかった。以下では第1号礫集中箇所、第2号礫集中箇所、第3号礫集中箇所と表記し説明する。

第1号礫集中箇所(礫集中01)は、206-230グリット、基本層序4層中で確認した。204-228~231グリット周辺の高まりと207-228~230グリット周辺の高まりとの間で確認された。窪地内に位置する。第1号礫集中箇所は142点の礫で構成されていた。石材の内訳は、安山岩134点(13890.94g)、チャート6点(130.97g)、砂岩1点(41.28g)、軽石1点(10.99g)であった。

第2号礫集中箇所(礫集中02)は、205-230グリット、基本層序4層精査中に確認した。204-228~231グリット

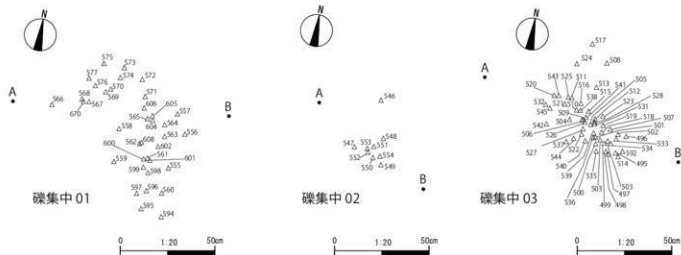


図27 医学部百年記念館地点第1号礫集中箇所~第3号礫集中箇所の平面図



図28 医学部百年記念館地点の第4号土器片集中箇所出土土器実測図及び拓影図

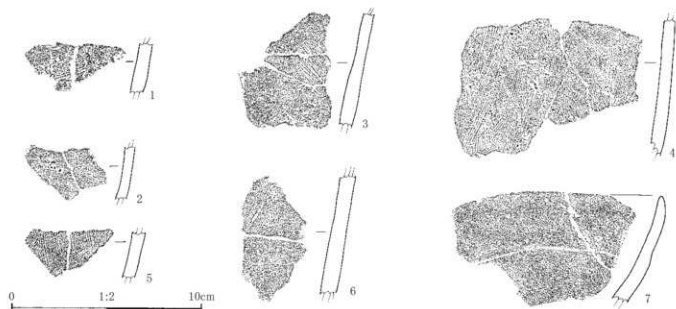


図 29 医学部百年記念館地点基本層序 4 層の遺構外出土土器実測図及び拓影図

表 7 医学部百年記念館地点基本層序 4 層の土器片集中箇所出土土器観察表

図録番号	接合番号	器種	部位	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	器面調整		時期	層位	遺物番号 (出土グリッド)	写真番号	備考
								外面	内面					
28-1	4	甕	口縁部 一部	—	33.0	—	1536.6	押痕 (横・縦)、沈 視文 (横・縦二条 ずつ等間隔)、保 付着	ミガキ (横)、保付 着	押文	1層	(TP11 塵土) 試掘-736	4-5	第 4 号土器片集中
											3a 層	(205-229) 349 (206-229) 試掘-22, 26		
											4層	(205-229) 328a-f, h-n, p, q, s, u, v, z, aa, bb, dd, ff-oo, qq, ss-tt, xx, ddd, eee, hhh, jjj, kkk, mm, uuu~xxx, zzz, eeee (206-229) 試掘-9, 11, 15, 27, 29, 30		

表 8 医学部百年記念館地点基本層序 4 層の遺構外出土土器観察表

図録番号	接合番号	器種	部位	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	器面調整		時期	層位	遺物番号 (出土グリッド)	写真番号	備考
								外面	内面					
29-1	6	甕	胴部	—	—	—	8.80	押痕 (斜)	ナデ	押文	4層	(205-229) 328, 328ff	4-6	
29-2	8	甕	胴部	—	—	—	7.40	押痕 (斜)	ミガキ	押文	4層	(205-229) 328bbb, 328ttt	4-7	
29-3	5	甕	胴部	—	—	—	21.33	押痕 (斜・扇歯状)	ミガキ、押痕 (縦)	押文	4層	(205-229) 328r, 328ii	4-8	
29-4	10	甕	胴部	—	—	—	50.03	押痕 (扇歯状)	ミガキ (縦)	押文	4層	(205-229) 328g, 328q, 328aa	4-9	
29-5	9	甕	胴部	—	—	—	7.90	押痕 (縦)	ナデ	押文	4層	(205-229) 328yy, 328ggg	4-10	
29-6	7	甕	胴部	—	—	—	18.52	押痕 (斜)	ミガキ	押文	4層	(205-229) 328x (206-229) 試掘-25	4-11	
29-7	27	坏	口縁部	—	—	—	42.04	沈視文、ナデ (横)	ミガキ (横)	押文	4層	(207-229) 314, 315	4-12	

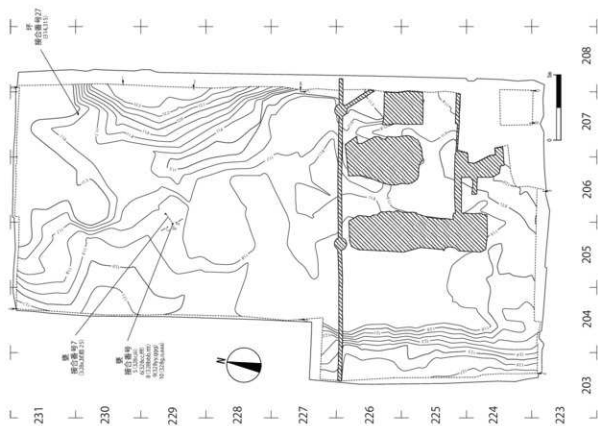


図 31 医学部百年記念館地点基本層序 4 層で確認した接合資料分布図(2)

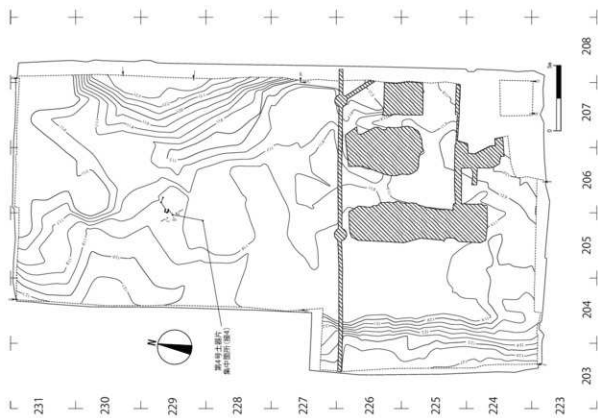


図 30 医学部百年記念館地点基本層序 4 層で確認した接合資料分布図(1)

ト周辺の高まりの傾斜地に位置する。第2号礫集中箇所では、礫9点が存在した。すべて安山岩(2244.13g)である。

第3号礫集中箇所(礫集中03)は、206-231グリット、基本層序4層精査中に確認した。204-228~231グリット周辺の高まりと207-228~230グリット周辺の高まりとの間にみられる窪地に位置する。第3号礫集中箇所では、礫58点がみられた。石材の内訳は、安山岩51点(3536.54g)、チャート4点(75.15g)、砂岩3点(267.28g)である。

B. 遺物

基本層序4層における遺構外出土遺物は総数251点(62937.52g)であった。その内訳は、土器片68点(495.73g)、石器1点(527.21g)、礫182点(61914.58g)である。

(a) 土器

基本層序4層で出土した土器片は、主に捺文土器であった。以下では種類と点数を示す。基本層序4層では捺文土器片68点(差66点、坏2点)が確認できた。図29で主な資料を図示し、表8で主な資料の特徴をまとめた。

a-1 主な土器の説明

図29:1~6は、捺文土器の甕の胴部片である。3,4では、外面で鋸歯状に施された捺痕がみられる。

図29:7は、捺文土器の坏の口縁部片である。外面では、口縁部に横位のナデがみられ、胴部で沈線文1本が横位に施文される。内面では、横位のミガキが観察できる。口径に対して底径が約1/3となる器形と推定する。

a-2 土器片の接合状況

基本層序4層で確認した捺文土器片を器種に分け、破片同士の接合状況を分析した結果を図31に示した。接合して1個体に復原できた資料が少なく、不明な点があるが、205-229グリット周辺より北側で甕や坏の破片が接合した傾向がみられる。

(b) 石器

基本層序4層で確認された石器1点は、安山岩製の敲き石である。図32:1で実測図を示した。正面上位に敲き痕が重複して観察できる(表9)。

(c) 礫

基本層序4層で出土した礫182点は、安山岩170点、

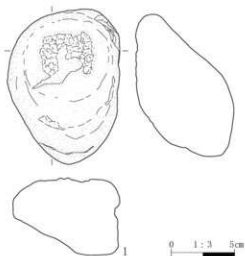


図32 医学部百年記念館地点基本層序4層の遺構外出土石器実測図

チャート3点、砂岩6点、軽石2点、泥岩1点であった。(守屋)

(4) 5層から発見された遺構と遺物

A. 遺構

基本層序5層から確認された遺構は、木杭址1基である。以下で説明する。

第1号木杭址は、207-228グリット、基本層序5層の掘削途中で木杭上部を確認した。207-228~230グリット周辺の高まり南側の傾斜地に位置する(図33)。第1号木杭址の断面図を図34に示した。木杭は北東方向から南西方向に向かって傾いて設置されていた。木杭の先端は基本層序8層まで打ち込まれていた。木杭の打ち込まれた地層面は調査で特定できなかったが、基本層序5層中に接していた木杭の表面が腐食していたことから、基本層序5層堆積後に打ち込まれ、木杭の腐食が進行した可能性があった。図35:1に第1号木杭址から発見された木杭の実測図を示す。

木杭は最大長36.6cm、最大幅7.1cmの大きさである。断面形は円形である。表面では樹皮がみられなかった。基本層序8層まで打ち込まれた先端部分では、鋭利な道具による切っ先痕が観察でき、円棒に対してV字状に先端をとがらせる形態であった。切っ先痕跡から鉄器の使用が推測できる。木杭に利用された樹種の同定を実施した結果、トネリコ属と分かった(詳細は後述の

表9 医学部百年記念館地点基本層序4層の遺構外出土石器観察表

挿入番号	遺物番号	層位	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	破損	遺存状態	写真番号	備考
32-1	566	4層(レキ1)	敲き石	安山岩	123.0	89.0	79.0	966.50	—	完形	4-13	敲打痕強い。

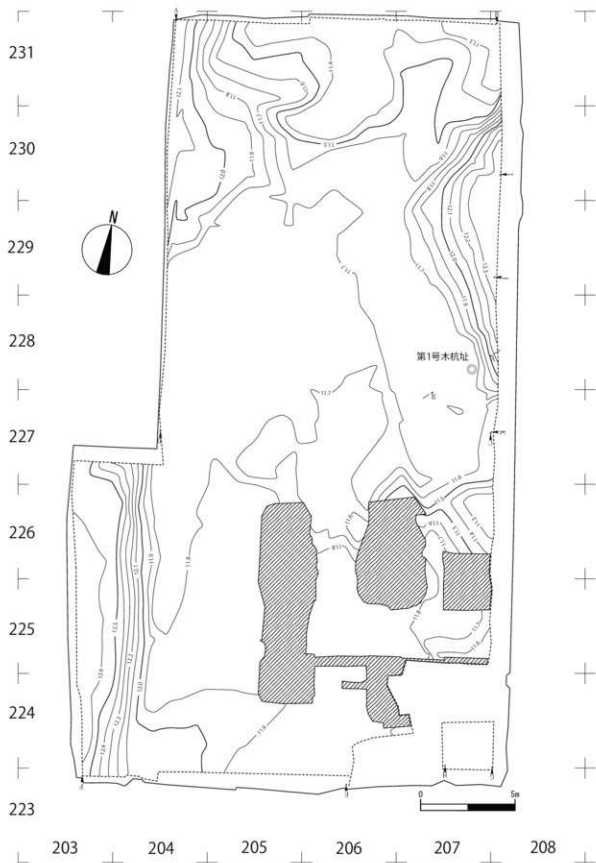


図 33 医学部百年記念館地点基本層序 5 層で確認した遺構の分布図

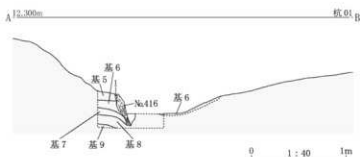


図34 医学部百年記念館地点第1号木杭址セクション図

5-A: 樹種同定分析結果で示す)。また、時期については、分析試料を採取して、放射性炭素年代測定を実施したところ、7世紀後半から8世紀後半の暦年代範囲との結果であった。擦文前期に位置づけられる可能性がある。

B. 遺物

基本層序5層における遺構外出土遺物は総数95点(18634.29g)であった。その内訳は、土器片1点(6.06g)、礎94点(18628.23g)である。

(a) 土器

基本層序5層で出土した土器片1点は、時期不明の土

表10 医学部百年記念館地点第1号木杭址の土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
第1号木杭址	1	7.5 YR 6/4	にぶい橙色	砂	強	やや弱	
	基5	10 YR 5/3	灰色	粘土質シルト	弱	中	
	基6	10 YR 5/1	にぶい黄褐色	粘土	強	中	
	基7	10 YR 5/1	灰色	砂質シルト	やや強	中	
	基8	10 YR 5/2	オリーブ灰色	粘土	強	やや弱	
	基9	10 YR 4/2	オリーブ灰色	粗砂	弱	弱	

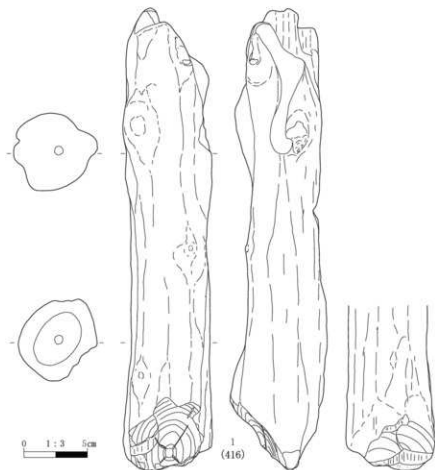


図35 医学部百年記念館地点第1号木杭址出土の杭の実測図

器片であった。小破片のため、時期判断ができなかった。

(b) 礫

基本層序5層で出土した礫94点は、安山岩89点、砂岩3点、チャート2点の内訳である。図36:1は、安山岩の礫である。表面で敲き痕があるように観察されたが、明瞭でないため、礫と判断した。

(守屋)

5. 自然科学分析

A. K39遺跡医学部百年記念館地点にて出土した木杭の樹種同定

a. はじめに

平成29年に実施されたK39遺跡医学部百年記念館地点の発掘調査で出土した木質遺物1点(図35, 表11)の樹種識別を行った結果について以下に報告する。この遺物は軟化が進んだ円柱状の生材で、一端には中心部を尖らせた角錐状の加工痕があることから、杭材とされる。埋設していた地層から縄文文化期の遺物と推定され、C¹⁴年代測定では8世紀後半の遺物であるとの結果が得られている。

b. 研究方法

埋蔵文化財調査センターにて水浸状態で保管されている

表11 医学部百年記念館地点第1号木杭址出土の杭の観察表

挿図番号	遺物番号	層位	器種	契種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(湿)(g)	被熱	遺存状態	写真番号	備考
35-1	416	第1号木杭址:5層~8層	木杭	トネリコ属	366.0	71.0	73.0	1007.50	—	—	5-1	下層つぶれている。

表12 医学部百年記念館地点基本層序5層の遺構外出土礫観察表

挿図番号	遺物番号	層位	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	被熱	遺存状態	写真番号	備考
36-1	538	5層	礫	安山岩	244.0	225.0	109.0	7610.00	—	完形	5-2	

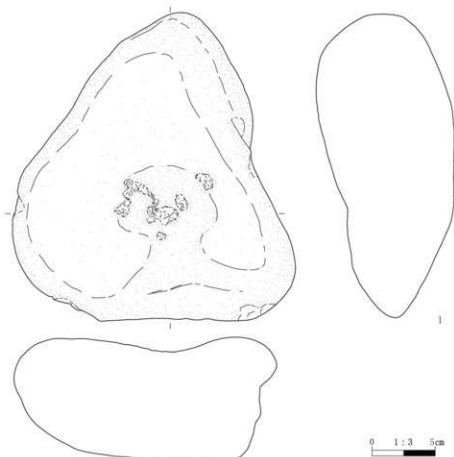


図36 医学部百年記念館地点基本層序5層の遺構外出土礫実測図

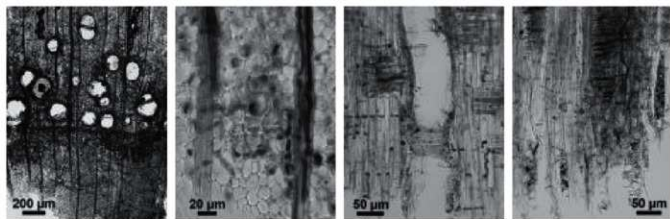


写真1 医学部百年記念館地点木杭址出土の木質遺物 (No.416) の木口切片 (左から A, B, C, D)。

A: 年輪界を含む木口面の概観, B: 晩材部の道管とその周辺 (木口面), C: 道管とその周辺 (柢目面), D: 1-2列の放射組織 (板目面)。

た試料より、超音波カッター (SUW-30 CT: SUZUKI) を用いて、木口面、柢目面、板目面の切片を薄切した。この際、加工痕とその近辺からの切片採取は避け、とくに木口切片と柢目切片は自然に生じたと見なされる亀裂や凹部から得るようにした。無染色のまま水溶性封入剤 (Aquatex: MERCK) を用いて永久プレパラートを作製した。光学顕微鏡で観察し、文献 (高地と伊東 1985) やデータベース (森林総合研究所 日本産木材識別データベース) を参照して同定した。

c. 結果と考察

内部に菌糸が蔓延して材組織の劣化が進んでいたため観察できる解剖学的特徴は限られたが、次のような特徴を確認することができた (写真1: A-D)。

環孔状。道管は早晩材とも散在。早材部では2個、晩材部では3個までの放射複合道管が見え、晩材部の小道管は厚壁。道管相互壁孔は交互状で微細。軸方向柔組織は周囲状~随伴散在および成長輪界状。放射組織の幅は1-3細胞。高さは500 μm以下。構成細胞は平伏細胞。以上の特徴から、トネリコ属 *Fraxinus* と同定される。これまでも近隣の遺構ではトネリコ属の木製品や自然木が他の樹種・群に比べて圧倒的に数多く出土し、それらは当地域の水辺林の主要構成種の一つであるヤチダモ *F. mandshurica* と考えられている。本遺物もそうした出土地点周辺の水辺林の立木から採取、加工して使われたものとみられる。

(北海道大学大学院農学研究院 [佐野雄三])

d. 樹種同定を実施した資料の状態 (コメント)

第1号木杭址の杭は、基本層序5層を精査している際に杭の上部端が露出したため、平面で基本層序5層を掘削精査して、下に突き刺さっている状態と推測できた。

断面観察をするため、基本層序5層~基本層序9層までを杭の側面に沿って精査したところ、杭の先端が角錐状に加工されていることが分かり、遺構と判断した。現地調査の時点では杭自体を持ち上げられることができる状態であった。

(守屋)

B. 放射性炭素年代測定

a. はじめに

K39 遺跡医学部百年記念館地点の発掘調査で出土した試料4点について、加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を行った。

b. 試料と方法

試料は、基本層序5層~8層から出土した木杭 No.416 (PLD-35680) と、基本層序3層と4層、5層で採取された土壌に含まれていた炭化材 (PLD-35681~35683) である。いずれも最終形成年輪は残存しておらず、部位不明であった。

測定試料の情報、調整データは表13のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

c. 結果

表14に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、図37に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が

表 13 医学部百年記念館地点の測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-35680	グリッド: 207-228 層位: 5層~8層 試料 No. 416 遺物木枕 No. 416	種類: 生材 試料の性状: 最終形成年輪以外, 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 N, 水酸化ナトリウム: 1.0 N, 塩酸: 1.2 N)
PLD-35681	試料 No. 2 サンプル台帳 No. 20 層位: 基本層序 3層	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外, 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 N, 水酸化ナトリウム: 1.0 N, 塩酸: 1.2 N)
PLD-35682	試料 No. 5 サンプル台帳 No. 23 層位: 基本層序 4層	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外, 部位不明 部位: 小破片多数 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 N, 水酸化ナトリウム: 1.0 N, 塩酸: 1.2 N)
PLD-35683	試料 No. 6 サンプル台帳 No. 24 層位: 基本層序 5層	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外, 部位不明 部位: 小破片多数 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 N, 水酸化ナトリウム: 1.0 N, 塩酸: 1.2 N)

表 14 医学部百年記念館地点の放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-35680 試料 No. 416 遺物木枕 No. 416	-25.95 \pm 0.27	1290 \pm 20	1290 \pm 20	678-711cal AD (41.5%) 745-764cal AD (26.7%)	667-726cal AD (60.0%) 738-769cal AD (35.4%)
PLD-35681 試料 No. 2 サンプル台帳 No. 20 基本層序 3層	-28.08 \pm 0.25	955 \pm 19	955 \pm 20	1029-1046cal AD (22.1%) 1092-1123cal AD (37.0%) 1140-1148cal AD (9.2%)	1022-1057cal AD (29.2%) 1076-1154cal AD (66.2%)
PLD-35682 試料 No. 5 サンプル台帳 No. 23 基本層序 4層	-25.57 \pm 0.28	1081 \pm 23	1080 \pm 25	901-921cal AD (19.9%) 962-996cal AD (48.3%)	896-928cal AD (26.5%) 941-1017cal AD (68.9%)
PLD-35683 試料 No. 6 サンプル台帳 No. 24 基本層序 5層	-26.22 \pm 0.25	709 \pm 20	710 \pm 20	1274-1288cal AD (68.2%)	1264-1298cal AD (95.4%)

更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、

および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

d. 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち 2 σ 暦年代範囲 (確

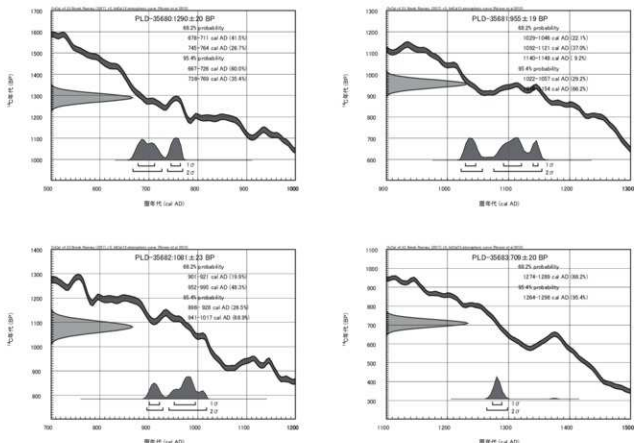


図 37 医学部百年記念館地点の暦年較正結果

率 95.4%) に着目して、結果を整理する。

基本層序 5 層に帰属する木杭 (PLD-35680) は、667-726cal AD (60.0%) および 738-769cal AD (35.4%) で、7 世紀後半～8 世紀後半の暦年代範囲であった。

基本層序 3 層の炭化材 (PLD-35681) は、1022-1057cal AD (29.2%) および 1076-1154cal AD (66.2%) で、11 世紀前半～12 世紀中頃の暦年代範囲であった。

基本層序 4 層の炭化材 (PLD-35682) は、896-928cal AD (26.5%) および 941-1017cal AD (68.9%) で、9 世紀末～11 世紀前半の暦年代範囲であった。

基本層序 5 層の炭化材 (PLD-35683) は、1264-1298cal AD (95.4%) で、13 世紀後半～末の暦年代範囲であった。

木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回の分析試料はいずれも最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であっ

たと考えられる。

(パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ: 伊藤 茂・佐藤 正教・廣田正史・山形秀樹・小林絏一・Zaur Lomtadize・黒沼保子)

e. 年代測定を実施した資料の状態 (コメント)

放射性年代測定を実施した資料は、第 1 号木杭出土の木杭。基本層序 3 層～基本層序 5 層に含まれていた炭化材である。木杭では、木材の最も外側に存在した傷から年代測定用試料を守屋が採取して、分析を依頼した。基本層序 3 層～5 層の炭化材は、遺跡の調査時、地層観察を実施して、各層に含まれていた炭化材を調査員が採取し、アルミホイルで保護し、当センターで保管していたものを分析依頼した (採取位置については図 11: I-J-K ラインのセクション図で示した)。

(守屋)

6. 小結

本地点の調査によって、埋没河道を確認し、窪地となっていた旧地形において、遺構・遺物を基本層序 2 層、基本層序 3 層、基本層序 4 層、基本層序 5 層で確認した。

基本層序2層では、旧地形に埋まった遺物を確認した一方、基本層序3層～基本層序5層では、焼土粒集中箇所(3層:3基)、土器片集中箇所(3層:3基、4層:1基)、礫集中箇所(4層:3基)、木杭址(5層:1基)の遺構を窪地内及び窪地に沿って確認した。各地層から発見された土器の特徴、放射性炭素年代測定の結果から、各層の堆積時期は、基本層序3層が擦文文化中期後半～後期、基本層序4層が擦文文化中期中頃、基本層序5層が擦文文化前期と大枠で位置づけられる。基本層序2層からは、擦文文化中期後半の土器片が出土した。しかし、発見点数が少ないことから、基本層序3層に帰属していた遺物が紛れ込んだ可能性がある。

焼土粒集中箇所、土器片集中箇所は、当時の人々が生活で生じた残渣を窪地に廃棄した行為の反映と推測する。DB 01～DB 03、第2号土器片集中箇所は、基本層序3層で確認した高まりから窪地へ向かう傾斜地に立地していた。高まりからの廃棄行為を連想させる。

一方、第1号土器片集中箇所、第3号土器片集中箇所

は、基本層序3層で確認された高まりから離れた窪地内、第4号土器片集中箇所は基本層序4層で確認された高まりから離れた窪地内で確認された。高まりからの廃棄行為とは考え難く、DB 01～DB 03、第2号土器片集中箇所と異なる所作の廃棄行為の結果かもしれない。

本地点の窪地内で第1号～第4号土器片集中箇所が現された理由は、本地点に近接した位置に擦文文化中期～後期の集落があったためと考えられるが、現状では本地点周辺での集落の存在は不明確である。本地点周辺で竪穴住居址が発見された地点は、本地点の北西方向約200mでK39遺跡北西地区ギガビット・ネットワーク配線地点、本地点の南西方向約170mで竪穴住居址の一部が地層断面で確認された工学部L棟東地点がある(図8)。両地点ともに本地点から距離がある。本地点に隣接して、擦文文化中期～後期に位置づけられる竪穴住居址が確認される可能性があり、今後の課題である。

(守屋)



写真2 医学部百年記念館地点の出土遺物(1)

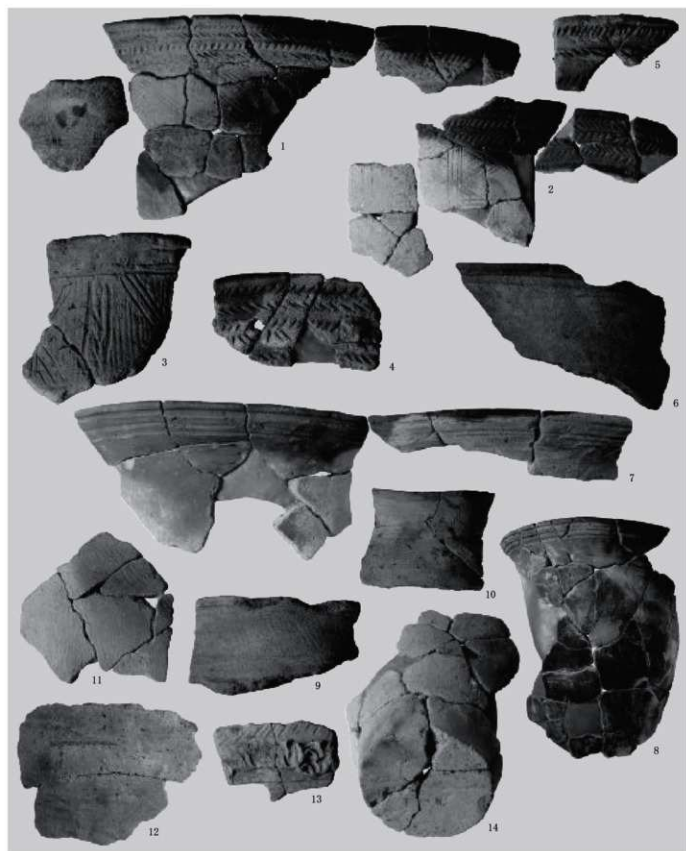


写真3 医学部百年記念館地点の出土遺物(2)



写真4 医学部百年記念館地点の出土遺物(3)

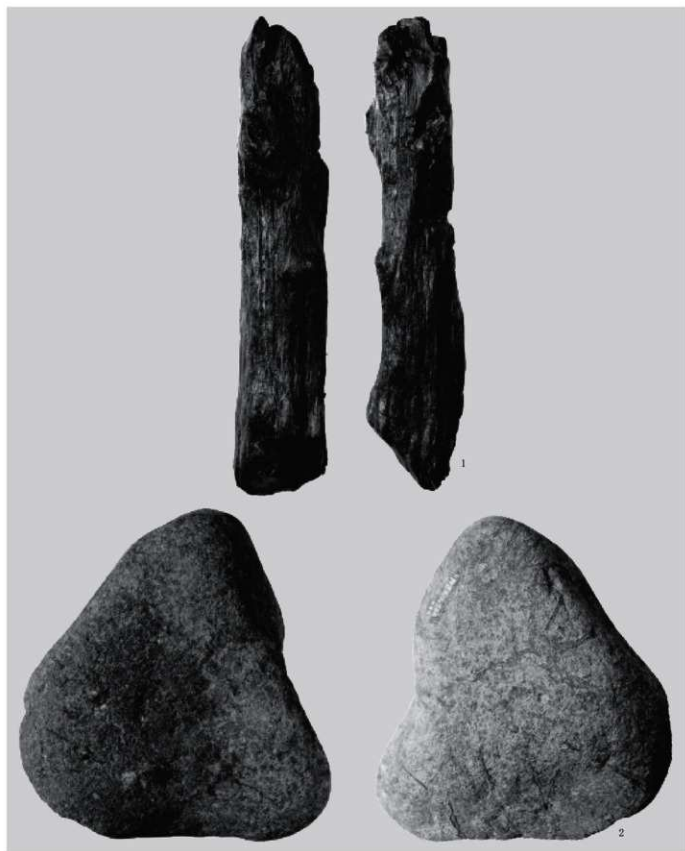


写真 5 医学部百年記念館地点の出土遺物(4)



A. 調査状況(遠景:南東より)



B. 調査状況(北端セクション:南西より)



C. 基本層序3層で発見された木(状態:南東より)



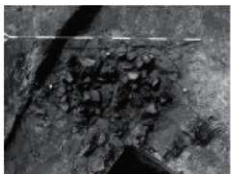
D. DB01の精査状況(セクション:北西より)



E. 第1号土器片集中箇所(平面:南より)



F. 第3号土器片集中箇所(平面:北より)



G. 第4号土器片集中箇所(平面:北東より)



H. 木杭址(セクション:北西より)

写真6 医学部百年記念館地点の調査

II-2 K 39 遺跡中央キャンパス教育学部北地点の計画調査

1. 調査の目的

北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、前身の埋蔵文化財調査室の時代を含め、長年にわたって北海道大学構内での工事に伴う事前調査に従事してきた。北海道大学埋蔵文化財調査センター運営委員会では、それとは別に、北海道大学構内における埋蔵文化財を文化資源として適切かつ有効に保護・活用していくために、平成27年度に「計画調査第一次中期計画」を策定し、それにもとづいた現地調査を平成28年度から開始した。この計画調査では、上記の目標のために、大学構内での埋設河道及びその周辺の地形面の形成過程を把握するとともに、河道沿いに展開していたと予測される遺跡の性格および広がりを明らかにしていくことを目的としている。

これまで本センターが実施してきた周辺での過去の調査成果から、上記の目的のために重点的な調査が必要と考えられた箇所として、平成28年度は南キャンパス理

学部地点で計画調査が実施された（小杉他編 2018）。平成29年度は中央キャンパス教育学部北地点で計画調査を実施している。本地点は埋蔵文化財調査センターの所在地に接している（図38）。平成29年8月30日付で北海道教育委員会に発掘調査の届出をおこない、108m²を対象とした調査を、平成29年10月19日～11月15日の期間に実施した。

本地点は、北緯43度4分26秒、東経141度20分33秒の座標位置にある。過去に調査が実施された周辺の地点としては、本地点より北側に、縄文晩期から統縄文前半期にかけての遺構・遺物が検出されているK39遺跡ゲストハウス地点（吉崎編 1995）、中央道路共同溝地点（吉崎編 1995）がある（図39）。平成29年度に確認調査が実施され、本書第Ⅲ章で報告する福利厚生施設地点は、本地点の北側に位置しているが、ここでも統縄文初頭の遺物の出土が確認されている。また本地点の周辺で擦文期の遺構・遺物が確認されている地点としては、北側に弓道場地点（小杉他編 2008）、南側に接して共同溝地点（吉崎・岡田編 1983）がある。弓道場地点では擦文中期、共同溝地点では擦文前期の竪穴住居址が確認されている。

教育学部北地点での計画調査は、第一に、弓道場地点

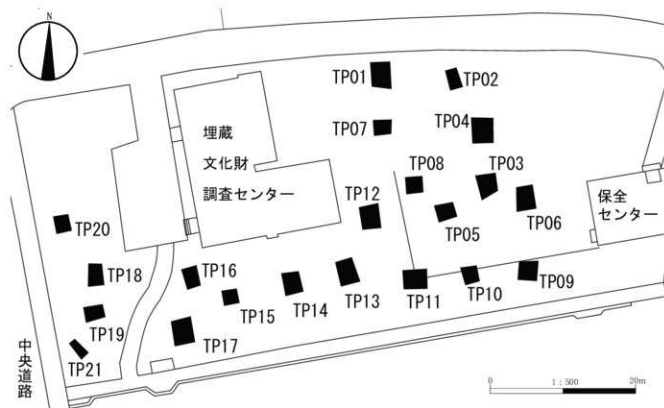


図38 中央キャンパス教育学部北地点試掘坑位置

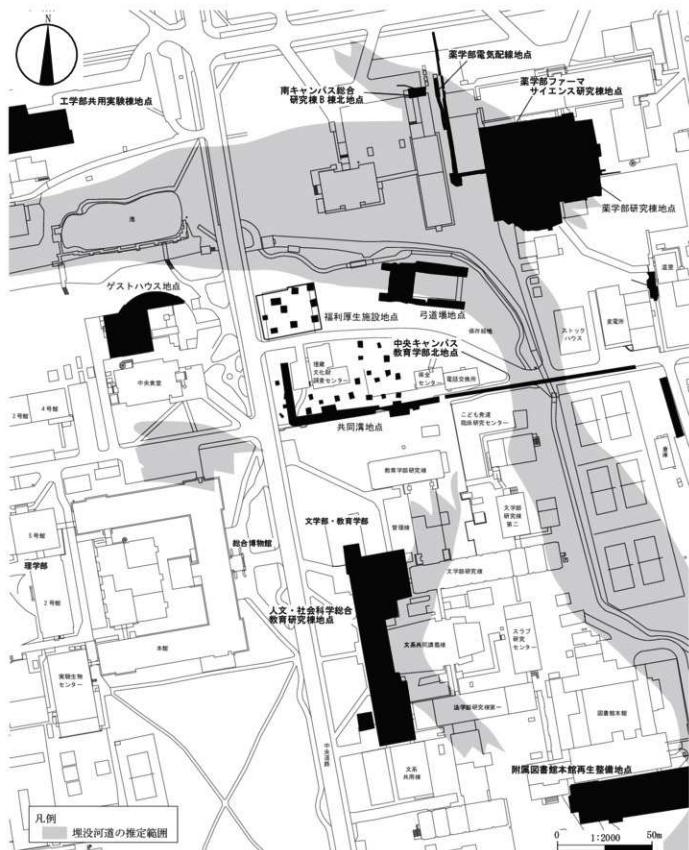


図 39 中央キャンパス教育学部北地点と周辺の地点

と共同溝地点という本地点の南北でそれぞれ確認されている掘文前・中期の遺構・遺物包含層がどのようなひろがりやを示しているのかを追跡していくことによって、当該期の集落の範囲やその周辺での活動痕跡を把握していくことを目的とした。第二に、本地点の北側に位置するゲストハウス地点や中央道路共同溝地点、福利厚生施設地点では縄文晩期後葉から統縄文前半期にかけての遺構・遺物包含層が確認されており、その南側のひろがりやを追跡していくことによって、当該期の活動地点のひろがりや古地形との関係を総合的に把握していくことを目的としている。

2. 調査の方法

本地点での計画調査は、上記の目的を達するために21箇所の調査坑（TP 01～21）を調査対象範囲内に配置し、遺構・遺物の有無や地形・堆積過程を明らかにするための調査を実施した。それぞれの調査坑の大きさは基本的に約2×2mで、深さは2.5～3.0mとした。ただし、既存の埋設物などの検出、あるいは安全性に対する配慮から、当初の予定通りの大きさと深さで調査が実施されていない調査坑もある。1.5m以上の深さで掘削を実施する場合には、段を設けて調査を進めた。遺構が確認された場合には、帰属時期や性格を把握するための掘り下げを最小限の範囲で実施することで、出来る限り遺構の現状のまま保存できるように配慮した。

各調査坑では1層の掘り下げを重機によって進め、それが終了した段階で遺構の有無を確認するために人力で精査をおこなっている。それより下位に関しては、重機で掘り下げを進めながら、遺物や遺構の存在が予測された層単に関しては、適時、人力による掘り下げと精査を実施している。

本発掘調査では、発掘区に設定した方眼を用いて各種の記録をおこなった。方眼は5×5mを基本グリッドとし、北海道大学構内全体を対象として設定したものである。仮想原点の設定は公共座標に対応させておこなっている。緯度44°00'00"、経度142°15'00"を基準点として、X軸方向に-103307.649m、Y軸方向に-74767.738mの地点を発掘区の仮想原点とした。Y軸の方位はN10°55'33"Wである。X軸とY軸の関係は数学系座標と同じであり、それぞれのグリッドにはアラビア数字で記号を付した。遺物の取り上げ、遺構や層序断面の記録などにあたっては、グリッドをもとにトータル・ステーションを使用して座標位置の記録をおこなった。遺物には通し番号を付し、種別や層単を記録した後、三次元座標値の記録をトータル・ステーションでおこない、取り上げ

ている。調査区範囲や堅穴住居址等の遺構の平面記録をおこなう際にもトータル・ステーションを利用した測量を実施している。調査坑や遺構の断面図記録は人手で10分の1スケールを基本におこなった。

21箇所の調査坑のうちTP 09で掘文期の堅穴住居址と土器が発見されている。堅穴住居址に関しては、遺存の確認をおこなった段階で、小規模なサブ・トレンチを設定し、覆土の堆積状況を確認するための調査をおこなっている。このサブ・トレンチ以外の範囲に関して掘り下げはおこなっていない。この住居址は、記録をおこなった後に養生をして埋め戻している。

3. 層序と古地形

本地点は、豊平川扇状地の末端と沖積低地が接する範囲に位置している。本地点は、北東側に位置するサクシュコトニ川の河谷から約50～70m離れた左岸の平坦面上に立地している。標高は約15mである。サクシュコトニ川は、本地点の北東側で、南から西へと流路の方向を変えて流下していたとみられる。微地形面としては、河谷よりも若干の比高差がある平坦面に立地していると考えられる。

本地点で確認された表層層序は、基本的に河川の営力によって運ばれてきた堆積物とその土壌化を受けたものから構成されていると考えられる。そうした性質を鑑み、堆積過程とその土壌化の履歴に留意しながら、層序の区分と記載を実施した（図40～42）。

各調査坑の層序は概ね共通している。TP 04では堆積物が良好な状況で遺存していたので、代表させて説明していくこととする。客土の下位には黒色シルト（2層）が認められた。有機物を多く含み、土壌化の発達が顕著に認められる。上部に層前a降下火山灰が含まれている調査坑もあった（TP 14・16・20）。また本層が削平されて、遺存していない調査坑も認められた。本層はTP 01・04・10・14・15・16・19・20・21で確認されたことから、本地点の南側および東側には分布が確認できたことになる。TP 09では本層が遺構・遺物包含層となっている。報告書での記載による限り、共同溝地点（吉崎・岡田編1983）で確認されている縄文期の遺構・遺物包含層も本層に对比可能なものとみられる。2層の下位には、にぶい褐色や明褐色の砂（3a～3f層）、褐色の砂（4層）、極暗褐色の粘土（5層）、黄褐色のシルト（6層）、暗赤褐色の粘土（7層）、にぶい褐色の砂（8a～8c層）、にぶい褐色や灰褐色の粘土（9a・9b層）、褐色のシルト質砂（10層）、褐色の砂質シルト（11層）、黒褐色の粘土（12層）、黒色の粘土（13層）、黄褐色のシルト（14層）、暗

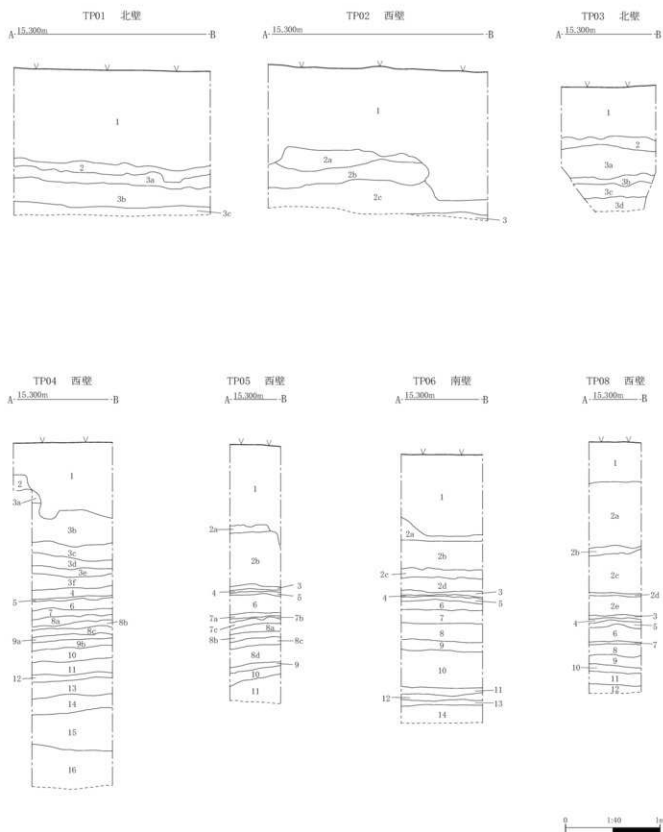


図 40 中央キャンパス教育学部北地点土層断面図(1)

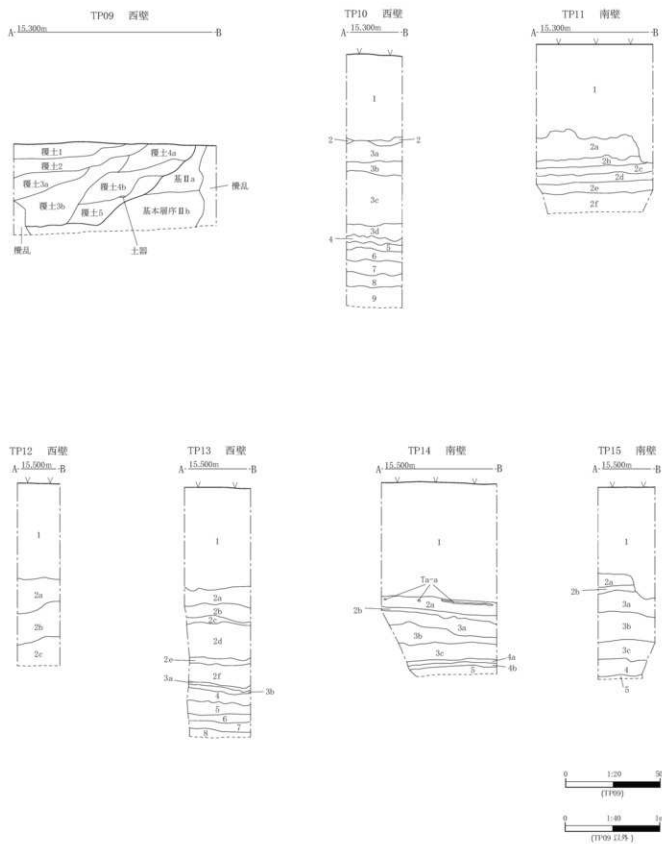


図41 中央キャンパス教育学部北地点土層断面図(2)

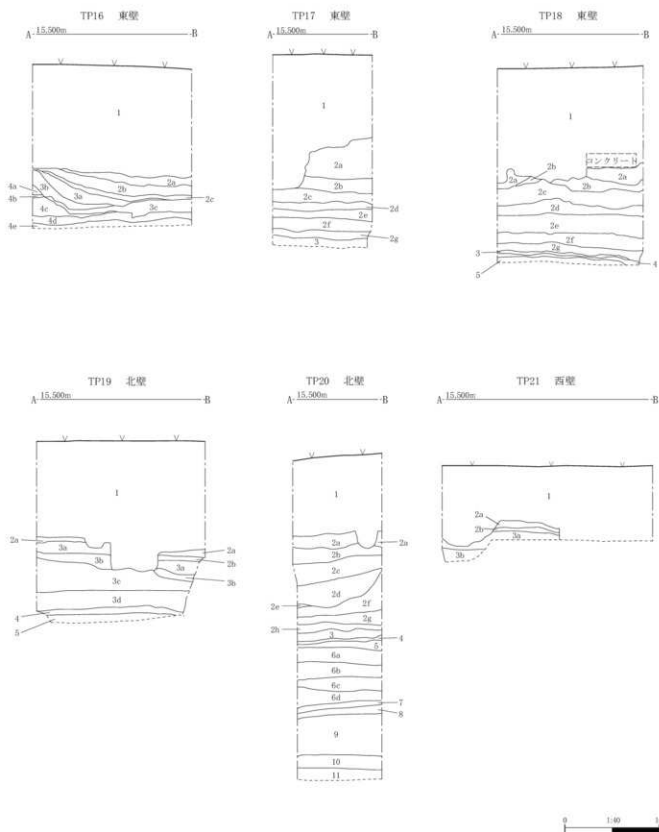


図 42 中央キャンパス教育学部北地点土層断面図(3)

表 15 中央キャンパス教育学部北地点土層観察表(1)

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP 01	1						客土
	2	7.5 YR 2/2	黒褐色	シルト	やや弱	やや弱	
	3a	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細砂～細粒砂	中	弱	
	3b	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	やや弱	中	
3c	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	中	中		
TP 02	1						客土
	2a	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	2b	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	2c	7.5 YR 4/6	褐色	シルト質極細粒砂	やや強	中	
3	7.5 YR 6/3	にぶい褐色	極細粒砂	中	やや弱		
TP 03	1						客土
	2	7.5 YR 4/6	褐色	細粒砂	弱	弱	
	3a	10 YR 4/6	褐色	極細粒砂	弱	やや弱	
	3b	2.5Y5/6	黄褐色	細粒砂	弱	弱	
	3c	10 YR 4/6	褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
3d	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱		
TP 04	1						客土
	2	10 YR 2/1	黒色	シルト	やや弱	やや弱	
	3a	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	3b	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	3c	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	弱	やや弱	
	3d	7.5 YR 5/8	明褐色	極細粒砂	弱	弱	
	3e	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	弱	やや弱	
	3f	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	弱	弱	
	4	7.5 YR 4/3	褐色	シルト	中	中	
	5	7.5 YR 2/3	極暗褐色	粘土	中	中	
	6	2.5Y5/4	黄褐色	シルト	中	中	
	7	5 YR 3/4	暗赤褐色	粘土	やや強	中	
	8a	7.5 YR 6/3	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
	8b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	極細粒砂	弱	弱	
	8c	7.5 YR 6/3	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	弱	やや弱	
	9a	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	中	やや強	
9b	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	やや強		
10	7.5 YR 4/6	褐色	シルト質極細粒砂	中	中		
11	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂質シルト	中	やや強		
12	7.5 YR 2/1	黒褐色	粘土	強	やや強		
13	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	強		
14	10 YR 5/6	黄褐色	シルト	中	やや強		
15	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱		
16	10 YR 4/6	褐色	極細粒砂	弱	弱		
TP 05	1						客土
	2a	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	2b	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	3	10 YR 4/4	褐色	粘土	中	やや強	
	4	5 YR 2/4	極暗赤褐色	粘土	中	中	
	5	10 YR 4/4	褐色	粘土	中	やや強	
	6	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	7a	7.5 YR 4/3	褐色	粘土	やや強	やや強	
	7b	7.5 YR 2/2	黒褐色	極細粒砂	中	中	
	7c	7.5 YR 4/3	褐色	粘土	やや強	やや強	
	8a	2.5Y4/6	オリブ褐色	極細粒砂	中	やや弱	
8b	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土	中	中		
8c	10 YR 4/2	灰黄褐色	粘土	やや強	中		
8d	2.5Y4/6	オリブ褐色	極細粒砂	中	やや弱		
9	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	やや強		
10	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	やや強	強		
11	2.5Y4/6	オリブ褐色	極細粒砂	中	やや弱		
TP 06	1						客土
	2a	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	2b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	弱	やや弱	
	3a	7.5 YR 5/8	明褐色	極細粒砂	弱	弱	
	3b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	弱	やや弱	
	3c	7.5 YR 4/3	褐色	シルト	中	中	
	4	7.5 YR 2/3	極暗褐色	粘土	中	中	
	5	2.5Y5/4	黄褐色	シルト	中	中	
	6	7.5 YR 6/4	にぶい褐色	極細粒砂	弱	やや弱	
	7	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	中	中	
	8	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	極細粒砂	弱	弱	
	9	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	やや強	
	10	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	弱	弱	
	11	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
12	7.5 YR 4/3	褐色	シルト	やや弱	中		
13	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	やや強		
14	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	強		

7.5 YR 6/4 にぶい褐色シルトの薄層含む。

7.5 YR 6/4 にぶい褐色シルトの薄層含む。

表 16 中央キャンパス教育学部北地点土層観察表(2)

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP 08	1						客土
	2a	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	2b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	弱	やや弱	
	2c	7.5 YR 5/8	明褐色	極細粒砂	弱	弱	
	2d	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	弱	やや弱	
	2e	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	弱	弱	
	3	7.5 YR 4/3	褐色	シルト	中	中	7.5 YR 6/4 にぶい褐色シルトの薄層含む。
	4	7.5 YR 2/3	極暗褐色	粘土	中	中	
	5	2.5 Y5/4	黄褐色	シルト	中	中	
	6	7.5 YR 6/3	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
	7	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	極細粒砂	弱	弱	
	8	7.5 YR 6/3	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	弱	やや弱	
	9	7.5 YR 4/6	褐色	シルト質極細粒砂	中	中	
10	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂質シルト	中	中		
11	7.5 YR 4/3	褐色	粘土	やや強	やや強		
12	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱		
TP 09	覆土 1	7.5 YR 3/2	黒褐色	シルト	やや弱	やや弱	Ta-a 含む。
	覆土 2	10 YR 3/3	暗褐色	極細粒砂質シルト	やや弱	やや弱	
	覆土 3a	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細粒砂	弱	弱	
	覆土 3b	5 YR 3/4	暗赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	覆土 4a	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	弱	弱	
	覆土 4b	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	覆土 5	5 YR 3/4	暗赤褐色	細粒～中粒砂	弱	弱	
	II a	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細粒砂	弱	弱	
	II b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	極細粒砂	弱	やや弱	
	TP 10	1					
2		7.5 YR 2/1	黒色	シルト	弱	弱	
3a		5 YR 3/4	暗赤褐色	細粒～中粒砂	弱	弱	
3b		7.5 YR 5/6	明褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
3c		5 YR 4/6	赤褐色	極細粒砂質シルト	弱	中	
3d		7.5 YR 5/6	明褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
4		7.5 YR 4/4	褐色	粘土	中	やや強	
5		7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
6		7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	中	やや強	
7		2.5 Y4/4	オリーブ褐色	シルト	中	中	
8	10 YR 4/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	中		
9	2.5 Y4/4	オリーブ褐色	極細粒砂	弱	やや弱		
TP 11	1						客土
	2a	5 YR 2/4	極暗赤褐色	細粒～中粒砂	弱	弱	
	2b	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	2c	7.5 YR 4/4	褐色	シルト	中	中	
	2d	10 YR 4/6	褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
	2e	7.5 YR 4/4	褐色	シルト	やや強	中	
2f	10 YR 4/6	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱		
TP 12	1						客土
	2a	5 YR 3/4	暗赤褐色	細粒～中粒砂	弱	弱	
	2b	7.5 YR 4/6	褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
2c	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	中	やや弱		
TP 13	1						客土
	2a	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	やや弱	
	2b	7.5 YR 4/4	褐色	シルト	中	中	
	2c	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	2d	2.5 Y5/4	黄褐色	極細粒砂質シルト	中	やや弱	
	2e	2.5 YR 4/6	オリーブ褐色	極細粒砂	中	中	
	2f	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや強	中	5 YR 3/6 暗赤褐色極細粒砂の薄層含む。
	3a	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中	
	3b	7.5 YR 4/4	褐色	粘土	中	中	
	4	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	5	5 YR 4/3	にぶい赤褐色	シルト	中	中	
	6	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	やや弱	弱	
7	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	中	中		
8	5 YR 4/3	にぶい赤褐色	粘土	中	中		
TP 14	1						客土
	2a	7.5 YR 2/2	黒褐色	シルト	やや弱	弱	上部に Ta-a 含む。
	2b	7.5 YR 3/3	暗褐色	シルト	やや弱	やや弱	
	3a	5 YR 2/4	極暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	3b	7.5 YR 4/4	褐色	シルト質極細粒砂	中	やや弱	
	3c	7.5 YR 5/8	明褐色	シルト	やや強	中	
	4a	7.5 YR 4/3	褐色	シルト	中	中	
	4b	7.5 YR 3/3	暗褐色	粘土	やや強	中	
5	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱		

表 17 中央キャンパス教育学部北地点土層観察表(3)

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP 15	1						客土
	2a	7.5 YR 2/2	黒褐色	シルト	弱	やや弱	
	2b	7.5 YR 3/3	暗褐色	シルト	やや弱	やや弱	
	3a	5 YR 3/4	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	3b	2.5Y4/6	オリーブ褐色	極細粒砂	中	やや弱	
TP 16	1						客土
	2a	7.5 YR 2/1	黒色	シルト	やや弱	やや弱	Ta-a 含む。
	2b	5 YR 1.7/1	黒色	シルト	やや弱	中	
	2c	7.5 YR 3/2	黒褐色	シルト	中	やや弱	
	3a	10 YR 4/4	褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
TP 17	1						客土
	2a	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	やや弱	
	2b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	中	やや弱	
	2c	5 YR 4/6	赤褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	2d	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	弱	
	2e	7.5 YR 5/6	明褐色	粘土質シルト	やや強	中	
	2f	2.5Y5/4	黄褐色	粘土	やや強	中	
	2g	5 YR 4/6	赤褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	
TP 18	1						客土
	2a	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	2b	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	やや弱	弱	
	2c	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
	2d	5 YR 4/6	赤褐色	シルト	中	やや弱	
	2e	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
	2f	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	やや強	やや強	
	2g	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	弱	弱	
TP 19	1						客土
	2a	7.5 YR 2/1	黒色	シルト	やや弱	やや弱	
	2b	7.5 YR 3/4	暗褐色	極細粒砂質シルト	弱	弱	
	3a	5 YR 2/4	極暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	3b	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	中	中	
TP 20	1						客土
	2a	10 YR 1.7/1	黒色	シルト	弱	中	上部に Ta-a 含む。
	2b	10 YR 2/3	黒褐色	シルト	弱	中	
	2c	10 YR 4/4	褐色	極細粒砂質シルト	弱	中	
	2d	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	弱	中	
	2e	10 YR 4/2	灰黄褐色	シルト質極細粒砂	弱	弱	
	2f	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	細粒砂	中	強	
	2g	10 YR 6/6	明黄褐色	極細粒砂	中	強	
	2h	10 YR 5/2	灰黄褐色	シルト	強	強	
	3	10 YR 6/1	褐灰色	シルト	強	強	
	4	10 YR 3/2	黒褐色	粘土	強	強	植物含む。炭化物少量含む。
TP 21	1						客土
	2a	7.5 YR 2/1	黒色	シルト	やや弱	やや弱	
	2b	7.5 YR 2/3	黒暗褐色	シルト	やや弱	やや弱	
	3a	5 YR 2/4	極暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	3b	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	やや弱	弱	

赤褐色の砂(15層)、褐色の砂(16層)という順での堆積が認められた。このうち5~7層、9a・9b層、12・13層は、有機物や斑紋を含み、土壌化の発達が認められる。本地点内の各調査坑の層序は概ね対応するとはいえ、層厚や岩相の変化は認められる。鍵層どうしの対比にもとづけば、TP 04の5~7層、9a・9b層、12・13層は、それぞれTP 06の4~7層、9層、13・14層、TP 20の4・5層、7・8層、10・11層に対比が可能である。また近隣の地点では、人文・社会科学総合教育研究棟地点(小杉他編2004)の基本層序の9層、12a~c層、14a~d層にそれぞれ対比が可能と考えられる。12a~c層では縄縄文前半期、14a~d層では縄文晩期後葉から縄縄文初期頭の遺構・遺物が検出されている。後述するように、TP 20では4層と10層から採取した炭化物を試料として放射性炭素年代測定を実施している。4層は $1,892 \pm 23$ yr BP、10層は $2,510 \pm 24$ yr BPであった。この分析結果は、人文・社会科学総合教育研究棟地点との層序の対比とそれから想定される年代観と整合的である。

4. 遺構と遺物

本地点での調査では、TP 09から遺構として堅穴住居址1基(HP 01)が検出され、その覆土から土器が出土している。

TP 09の南西側で、1層を除去した段階に、地表面から約0.6mの深さで黒色の覆土の落ち込みが確認されたことから、堅穴住居址が1基(HP 01)検出されるにいった。調査坑の東壁にそって幅0.2mほどのサブ・トレンチを設置し、覆土の掘り下げを進めていった。その結果、自然堆積による褐色の砂層を切るようにして1層から5層までに細分される覆土が堆積していることが判明した。TP 09では、TP 04で確認された2層に対比される黒色のシルト層が住居址の範囲外では確認されな

かったが、この層の下面が住居址の掘り込み面になると考えられる。

覆土の1層は黒褐色のシルト、2層は暗褐色の極細粒砂質シルト、3a層は暗赤褐色の極細粒砂、3b層は暗赤褐色の極細粒~細粒砂、4a層は褐色の極細粒砂、4b層は暗赤褐色の細粒砂、5層は暗赤褐色の細粒~中粒砂である。確認できた範囲での覆土の全体的な厚さは約40cmであった。下層から上層へむけて堆積物の岩相の細粒化が進んでいることがわかった。比較的速やかに堅穴の埋積が進み、窪みの状態になって覆土の2層や1層の形成がなされたとみられる。覆土の5層からは縄文期の土器が出土しており、本住居址の帰属時期を示すものと理解される。

本住居址は、本調査の目的を鑑み、発掘はなされていない。サブ・トレンチの範囲以外では覆土の掘り下げはおこなっていないため、本住居址はTP 09およびその南側に現状をほぼどとめて保存されている。

HP 01の覆土から出土した遺物は土器が1点(5.2g)である。土器はHP 01の覆土5層から出土した。坏の胴部資料であり、沈線文および刺突列が観察される。

(高倉)

5. 自然科学分析

(1) 放射性炭素年代測定

a. 測定対象試料

K 39 遺跡教育学部北地点は、北海道札幌市北区北11条西7丁目に所在し、サクシユコトニ川に沿った沖積低地の傾斜面に位置する。測定対象試料は、4層と10層から採取された炭化物各1点の合計2点である(表19)。

b. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理に



図4 中央キャンパス教育学部北地点出土の土器実測図及び拓影図



写真7 中央キャンパス教育学部北地点出土の土器

表18 中央キャンパス教育学部北地点出土土器観察表

発掘番号	接合番号	器種	部位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	重量(g)	断面調整		時期	層位	遺物番号	写真番号	備考
								外面	内面					
43-1	-	坏	胴部	-	-	-	5.2	沈線文(3条)、刺突列(2列)、ミガキ	ミガキ	縄文	212-1172c、HP01 覆土5層	1	7-1	

表 19 中央キャンパス教育学部北地点の放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号 試料名	採取 場所	試料形態	処理方法	炭素 含有率 (%)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-172376 No.1 TP 20	4層	炭化物 (土に同化しかけた 細片が散在、やや湿)	AaA (0.001~0.01 M : 7.5 時間)	71	-27.09±0.38	1,890±20	79.01±0.24
IAAA-172377 No.2	10層	炭化物 (土の中に細片が散 在、やや湿)	AaA (0.001 M : 0.5 時間)	18	-26.11±0.42	2,510±20	73.16±0.22

[IAA 登録番号 : # 8837]

表 20 中央キャンパス教育学部北地点の放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值, 暦年較正用 ^{14}C 年代, 較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-172376	1,930±20	78.67±0.23	1,892±23	80cal AD-128cal AD (68.2%)	58cal AD-174cal AD (92.0%) 192cal AD-211cal AD (3.4%)
IAAA-172377	2,530±20	73.00±0.21	2,510±24	771cal BC-748cal BC (14.0%) 685cal BC-667cal BC (10.9%) 642cal BC-587cal BC (31.3%) 581cal BC-556cal BC (12.1%)	788cal BC-729cal BC (24.3%) 693cal BC-658cal BC (15.8%) 652cal BC-542cal BC (55.3%)

[参考値]

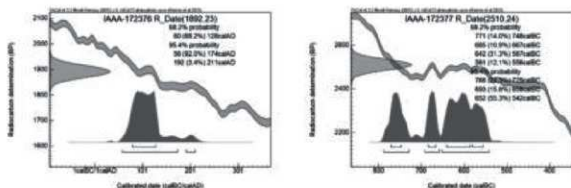


図 44 中央キャンパス教育学部北地点の暦年較正結果

より不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001 M から 1 M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1 M に達した時には「AAA」、1 M 未満の場合は「AaA」と表 19 に記載する。

- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

- (6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

c. 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{12}C 濃度 ($^{12}\text{C}/^{13}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この

標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

d. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 19)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 19 に、補正していない値を参考値として表 20 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 19 に、補正していない値を参考値として表 20 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal 13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv 4.3 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 20 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するため

に「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

e. 測定結果

測定結果を表 19、20 に示す。

4 層から採取された試料 No.1 の ^{14}C 年代は、1890 \pm 20yrBP、暦年較正年代 (1σ) は 80~128cal AD の範囲で示され、縄文時代前半期項に相当する (白杵編 2007)。10 層から採取された試料 No.2 の ^{14}C 年代は 2510 \pm 20yrBP、暦年較正年代 (1σ) は 771~556cal BC の間に 4 つの範囲で示される。縄文時代晩期後葉項に相当する (小林編 2008)。

なお、No.1 が含まれる 1~3 世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal に対しては日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なること指摘がある (尾善 2009、坂本 2010 など)。その日本産樹木のデータを用いてこの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は、No.1 が 71% の適正な値であった。No.2 は、土を完全に除去できず、18% と炭化物としては低い値となった。このため、No.2 については測定された炭素の由来に若干の注意を要するが、年代値に大きく影響するほどではないと考えられる。

(株式会社社加速器分析研究所)

(2) 自然科学分析結果に対するコメント

調査坑 TP 20 において把握された層序の年代的な位置づけを明らかにするために、4 層と 10 層から採取した炭化物を試料として放射性炭素年代測定を実施した。これまでの北海道大学構内遺跡における調査では、各地点での層序の年代的な位置づけを把握するために、土壌から回収された植物片や腐植物を試料として年代測定を実施することもあった。しかし、そうした試料を利用した場合、例えば平成 28 年度に調査された K39 遺跡南キャンパス理学部地点のように、ときに層序と年代測定値の前後関係に矛盾が生じるといった事態が起きていた (小杉他編 2018)。そうした事例においては、測定した炭素のコンタミネーションを考えなければならず、測定値をもって年代的な位置づけの基準とすることはできないことになる。そこで本地点での調査では、人工遺物の出土がなかった層序の年代的な位置づけをおこなう際にも、炭化物を試料として回収し、年代測定を実施することとした。そうして実施されたのが上述の 2 件の年代測定である。遺存状態としてはかならずしも良好ではないが、TP 20 で鍵となる層序である 4 層と 10 層から炭化物が回収で



A. TP01 調査区遠景 (東より)



B. 調査の様子1 (TP01:南より)



C. TP01 北壁 (南より)



D. TP02 西壁 (東より)



E. TP03 北壁 (南より)



F. TP04 調査区遠景 (北より)



G. TP04 西壁 (東より)



H. TP05 西壁 (東より)

写真8 中央キャンパス教育学部北地点の調査(1)



A. TP06 南壁 (北より)



B. TP08 西壁 (東より)



C. TP09 住居跡検出状況 (東より)



D. TP09 西壁 (東より)



E. TP10 西壁 (東より)



F. TP10 調査区遠景 (南より)



G. TP11 南壁 (北より)



H. TP12, TP13 調査区遠景 (北より)

写真9 中央キャンパス教育学部北地点の調査(2)



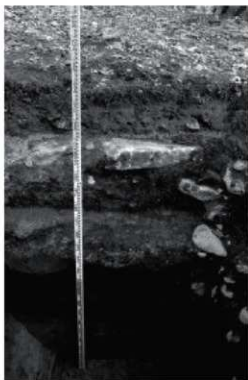
A. TP12 西壁 (東より)



B. 調査の様子 2 (TP13: 西より)



C. TP13 西壁 (東より)



D. TP14 南壁 (北より)



E. TP15 南壁 (北より)



F. TP16 東壁 (西より)

写真 10 中央キャンパス教育学部北地点の調査(3)



A. TP17 調査区遠景 (南西より)



B. TP17 東壁 (西より)



C. TP18 西壁 (東より)



D. TP19 北壁 (南より)



E. TP20 北壁 (南より)



F. TP20 北壁 (深堀り: 南より)



G. TP21 西壁 (東より)

写真 11 中央キャンパス教育学部北地点の調査(4)

きたので、年代測定試料とした。

岩相の諸特徴や層序的位置などから、TP 20 の 4・5 層、7・8 層、10・11 層は、それぞれ TP 04 の 5～7 層、9a・9b 層、12・13 層、TP 06 の 4～7 層、9 層、13・14 層に対比が可能である。また近隣の地点では、人文・社会科学総合教育研究棟地点（小杉他編 2004）の基本層序における 9 層、12a～c 層、14a～d 層に対比ができる。同地点では、12a～c 層からは統縄文前半期（恵山式期）、14a～d 層からは縄文晩期後葉から統縄文初期にかけての遺構・遺物が検出されており、ここで放射性炭素年代測定と整合的である。したがって、両層の年代的位相づけをおこなう際の基準として採用することが可能であると判断できよう。

6. まとめ

本地点は、豊平川扇状地の末端と沖積低地が接する範囲に位置し、サクシュコトニ川左岸に位置する平らな立地に立地している。地点内では、調査の結果、擦文期や統縄文期に相当する時期の自然堆積物の層相が把握できたが、いずれの層相の堆積物・土壌も概ね平坦に堆積しており、古地形の顕著な起伏は確認されていない。埋没河道は本地点の東側および北側にあったと推定される。

これまで実施されてきた周辺での過去の調査成果からは、本地点の北側には縄文晩期後葉から統縄文前半期に

かけての活動痕跡が残されていたことがわかっている。それらのうちゲスト・ハウス地点や中央道路共同溝地点で確認された遺物・遺構包含層は、本地点の TP 04 では 9a・9b 層に対応すると考えられる。本地点では当該期の遺物や遺構は検出されなかった。したがって、それらの遺構・遺物のひろがりには、本章で報告する福利厚生施設地点よりも南側には及んでいなかったことになる。当該期における活動痕跡のひろがりを把握することができたことになろう。

一方で、本地点の TP 09 では、擦文期の堅穴住居址が検出された。擦文期の遺物・遺構包含層が本地点にもひろがっていたことになる。ただし、本地点の堅穴住居址 HP 01 から出土した遺物が僅かであったために、縄文時代の特定は困難である。そのため、本地点の南側に接して確認された共同溝地点における擦文期の集落と同一時期のものであるのかどうかは不明である。擦文期の遺構・遺物包含層になっていたと考えられる客土直下の黒色シルト層は、削平を受けて残っていない調査坑も多かったが、TP 01・04・10・14・15・16・19・20・21 で検出されていることから、本地点の南側および東側では広範囲に分布がおよんでいた可能性が高いといえよう。

（高倉）

第Ⅲ章 確認・立会調査の成果

Ⅲ-1 確認・立会調査で確認された層序

1. 層序

1章で述べた通り、平成29年度に北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、2件の確認調査、10件の立会調査を実施し、大学構内各地で層序記録に関する断面の調査をおこなってきた。本節では、このうち確認調査が実施され、縄文期の遺物の出土もあった福利厚生施設新営工事に伴う調査(図39)によって確認された層序を示し、北大構内標準層序(吉崎編1995)との対比をおこなう。福利厚生施設地点で実施された調査成果については、次節を参照していただきたい。

福利厚生施設地点のTP06は、北大構内標準層序の指標とされた層序が記録されたゲストハウス地点から東へ40mほどの距離に位置する。地表面から約1mの深さまでが客土で、それより下位に自然堆積の堆積物が認められる(図45)。2a層は暗赤褐色の中粒砂、2b層はにぶい褐色のシルト、2c層は褐色の極細粒砂、2d層は褐色の極細粒砂質シルト、2e層は褐色のシルトである。2a～2e層は相対的に粗粒の堆積物であり、層厚も調査坑によって変化する。3a層は暗赤褐色の粘土、3b層はにぶい褐色の粘土である。波打つように上下に褶曲して堆積している。3層以下には相対的に細粒の堆積物の堆積が

認められる。4層は黄褐色の粘土である。5層はにぶい褐色のシルトである。6層は黄褐色の極細粒砂である。7層は褐色の粘土である。8層は黒褐色の粘土である。9層は褐色の粘土質シルトである。10層は暗オリーブ色の細粒砂である。11層は明褐色の粘土である。12層は

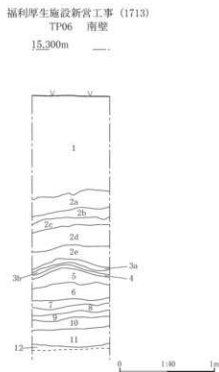


図45 構内確認・立会調査セクション図

表21 北大構内確認調査層序観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
福利厚生施設 新営工事 (1713)	1						客土
TP06 南壁	2a	5YR3/4	暗赤褐色	中粒砂	弱	弱	
	2b	7.5YR5/4	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
	2c	7.5YR4/4	褐色	極細粒砂	中	中	
	2d	10YR4/6	褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
	2e	7.5YR4/6	褐色	シルト	やや強	中	
	3a	5YR3/4	暗赤褐色	粘土	強	やや強	
	3b	7.5YR5/3	にぶい褐色	粘土	中	やや弱	
	4	2.5Y5/4	黄褐色	粘土	強	中	
	5	7.5YR5/4	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
	6	2.5Y3/4	黄褐色	極細粒砂	中	中	
	7	10YR4/4	褐色	粘土	強	やや強	
	8	10YR3/2	黒褐色	粘土	強	やや強	
9	7.5YR4/6	褐色	粘土質シルト	強	やや強		
10	5Y4/4	暗オリーブ色	細粒砂	弱	やや弱		
11	7.5YR5/6	明褐色	粘土	強	やや強		
12	10YR3/4	暗褐色	粘土	強	やや強	遺物包含層	

暗褐色の粘土である。統縄文期初頭の遺物包含層である。炭化物を多量に含む。

北大構内標準層序との対比では、3・4層以下がⅢ層、7・8層以下がⅣ層、12層がⅤ層の上部に対応すると考えられる。福利厚生施設地点の3・4層は、構内標準層序でのⅢ層と比較すると、黒みが強くないという差異は認められるものの、概ね類似した層序がゲストハウス地点から福利厚生施設地点まで分布しているとみることができると。

III-2 2017年度確認調査・立会調査の結果

a. 事務局本館植栽復旧工事 (1701)

事務局本館の西側で生垣および樹木移植のための工事が実施された。13.1 m²の工事予定地内に関して、立会調査を実施した。地表下0.3~0.4 mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。遺物・遺構は検出されなかった。

b. 大学病院植栽工事 (1702)

大学病院南側の位置で、樹木植栽のための工事が実施された。0.8 m²の工事予定地内に関して、立会調査を実施した。地表下0.3 mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。遺物・遺構は検出されなかった。

c. 農学部園場給水管修理工事 (1703)

農学部園場内で給水管の損傷による漏水が発生し、緊急で修復工事が実施された。0.45 m²の工事範囲に関して、立会調査を実施した。地表下約0.6 mの深さまで掘削された。南側の一部の範囲では過去の工事による攪乱が地表下約0.6 mの深さまで及んでいた。北側の範囲では地表下約0.4 mの深さまでが客土で、その下位には褐色の砂層が確認された。遺物・遺構は検出されなかった。

d. 医学部百年記念館新営工事 (1704)

前章で報告した。

e. 北大病院保育園ポプラ給水管改修工事 (1706)

保育園ポプラ東側の位置で給水管の改修のため工事が実施された。3.5 m²の工事予定地内に関して、立会調査を実施した。地表下1.0 mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。遺物・遺構は検出されなかった。

f. 農学部園場給水管更新工事 (1708)

理学部の南側の農学部園場内で給水管の更新のための

工事が実施された。44 m²の工事予定地内に関して、立会調査を実施した。地表下約1.1 mの深さまで掘削された。工事範囲のうち北東側・北西側では自然堆積物が確認された。地表下約0.4 mまでが客土で、その下位には、砂・砂質シルト・粘土の順で堆積物の堆積が認められた。それ以外の範囲では、本工事の掘削深度は過去の工事による攪乱の範囲内であった。遺物・遺構は検出されなかった。

g. 獣医学部バドック新設工事 (1709)

獣医学部動物舎の南側でバドック用フェンス設置のための工事が実施された。25.8 m²の工事予定地内に関して、立会調査を実施した。地表下0.5~1.4 mの深さまで掘削され、地表下約1.0 mの深さまでが客土で、その下位には上から砂・粘土質シルトの順に堆積が確認された。遺物・遺構は検出されなかった。

h. モデルバーンフェンス改修工事 (1711)

モデルバーンの西側でフェンス設置のための工事が実施された。3.0 m²の工事予定地内に関して、立会調査を実施した。地表下0.6~0.8 mの深さまで掘削された。今回の工事による掘削は、過去の工事等によって掘削がなされた範囲にとどまっておらず、自然堆積物を新たに掘削することはなかった。遺物・遺構は検出されなかった。

i. 工学部屋外ガス管修理工事 (1712)

工学部材料化学系棟周辺でガス管の破損が生じたことから、緊急で復旧のための工事が実施された。1.0 m²の工事範囲に関して、立会調査を実施した。地表下約1.0 mの深さまで掘削された。すべて客土の範囲内であった。遺物・遺構は検出されなかった。

j. 福利厚生施設新営工事 (1713)

埋蔵文化財調査センター北側の位置で、福利厚生施設の建物およびその周辺でのアスファルト舗装・電気・給水管等の設置に伴う掘削工事が計画されたため、工事範囲内での埋蔵文化財の有無を確認するための調査が実施された。工事対象範囲は826 m²である。調査の結果、遺物の出土が確認されたため、以下では本工事箇所を福利厚生施設地点と呼称していく。

本地点は豊平川扇状地と沖積低地が接する範囲に位置している。本地点の北側にはサクシユコト二川の河谷がある。本地点の周辺にはゲストハウス地点や中央道路共同溝点が西側に所在する(図39)。

大きさが2×2 mで深さ1.5 mの調査坑を1箇所(TP 03)、2.5×2.5 mで深さ1.5 mの調査坑を1箇所(TP 04)、平均2.5×2.5 mで深さ3.0 mの調査坑(TP 01・02・05~09)を7箇所設定して調査を実施した(図49)。TP 02・04・07の掘削範囲はいずれも客土の範囲内にと

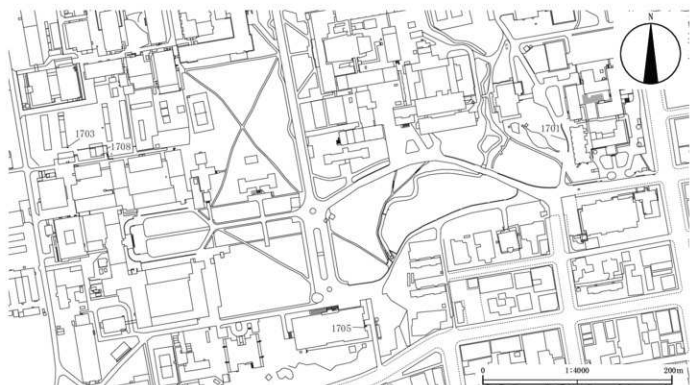


图 46 構内確認・立会調査位置図(1)

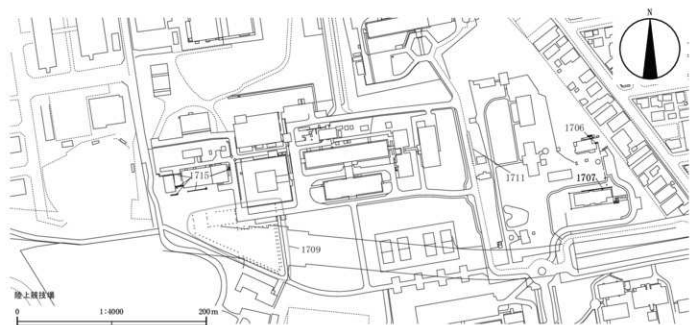


图 47 構内確認・立会調査位置図(2)

どまっていた。他の調査坑では、概ね地表下約0.6~1mの深さまでが客土で、その下位には自然堆積層の堆積が認められた。TP 03では客土の下位に黒色シルトが認められ、さらにその下位には土壌化が発達していないシルトや砂の堆積が確認された。TP 03の2層（黒色シルト）は、本地点周辺での既発掘調査の成果を鑑みると、推定期の遺物・遺構包含層に相当するものであったと考えられる。他の調査坑でこの層は確認できなかった。

よって、この時期の層準の大半が本地点では削平されてしまったとみられる。TP 05・06・08・09では、客土の下位には砂や粘土、シルトの堆積が認められ、それらのなかに黒褐色や暗褐色の粘土が挟入することが確認された（3・8・12層）。これらの粘土層は、いずれも有機物を多く含み、土壌化の発達も著しい。12層は炭化物を多量に含んでいた。本地点周辺での既発掘調査の成果を鑑みると、これらの層準は縄文晩期後葉から統縄文期にかけて

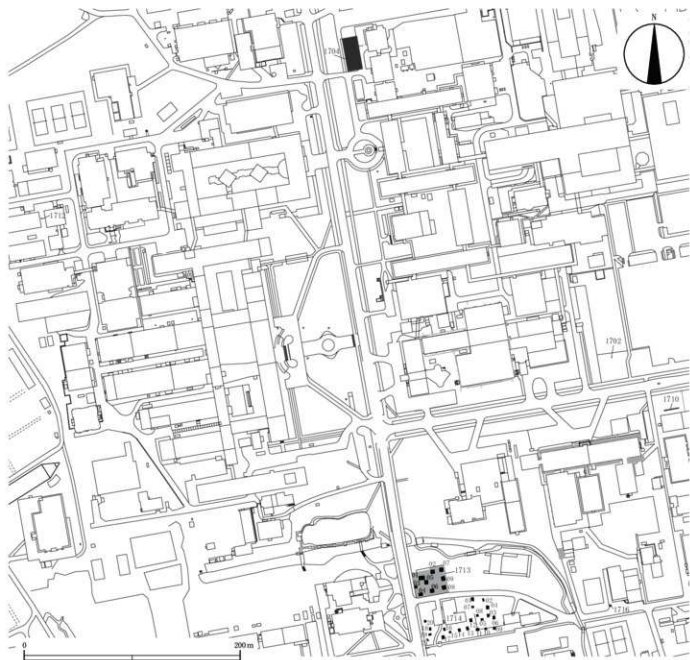


図 48 構内確認・立会調査位置図(3)

の遺物・遺構包含層に対比できるものと考えられる。TP01ではこれらの層が北西方向に傾斜している状況が確認できたため、本地点の北側に向けて埋没河道の斜面部がひろがっていた可能性がある。それ以外の調査坑では、堆積物は概ね水平に堆積しており、本地点の主たる範囲には河道に面した平坦面がひろがっていたと考えられる。

遺物はTP05・06・08・09から確認された。いずれも12層と呼称した、上から3枚目の黒褐色・暗褐色粘土層から出土している。この遺物包含層は共通して地表下約2.7~2.8mの深さから確認されている。他の層準からの遺物の出土は確認されなかった。本層準からは土器・石器・礫が出土している。出土土器の型式学的特徴から、それらは縄文初期頭に帰属するとみられる。本地点近辺のゲストハウス地点や中央道路共同溝地点（吉崎編1995）の遺物・遺構とほぼ同時期のものと考えられる。

本遺物包含層は、北側の一部を除く福利厚生施設新営工事予定地の主たる範囲内には分布していたとみられる。

なお本遺物包含層に関しては、TP09の一部を除き、その上面を検出し、遺物の出土を確認した時点で調査を終了し、養生の後、埋め戻している。TP09の一部に関しては、包含層の厚さとより下位に遺物包含層が存在するの否かを確認するために、本遺物包含層の掘削をおこなっている。

TP05から出土した遺物は、土器5点（87.6g）、石器16点（194.7g）、礫6点（42.5g）である。12層から出土した。土器は深鉢で、口縁部2点（87.6g）、胴部2点（31.5g）、底部1点（4.1g）である。石器は石核1点（88.3g）、剥片6点（36.0g）、碎片8点（0.36g）、敲石1点（70.0g）である。利用されている石材は、石核がチャート、剥片は黒曜石が4点（1.8g）、硬質頁岩が1点（8.9g）、珪質岩が1点（25.2g）、碎片はすべて黒曜

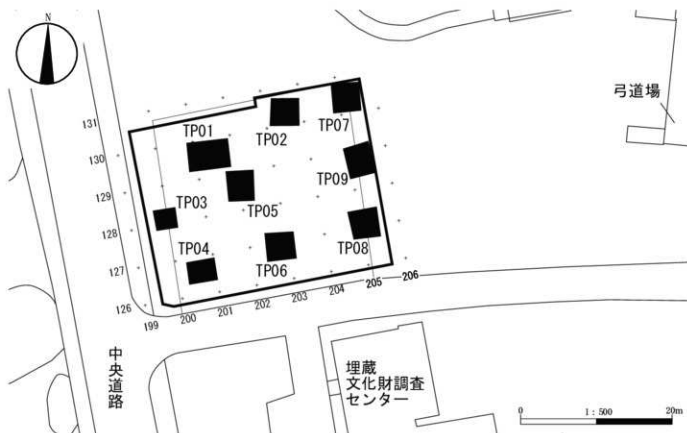


図49 福利厚生施設地点試掘坑位置

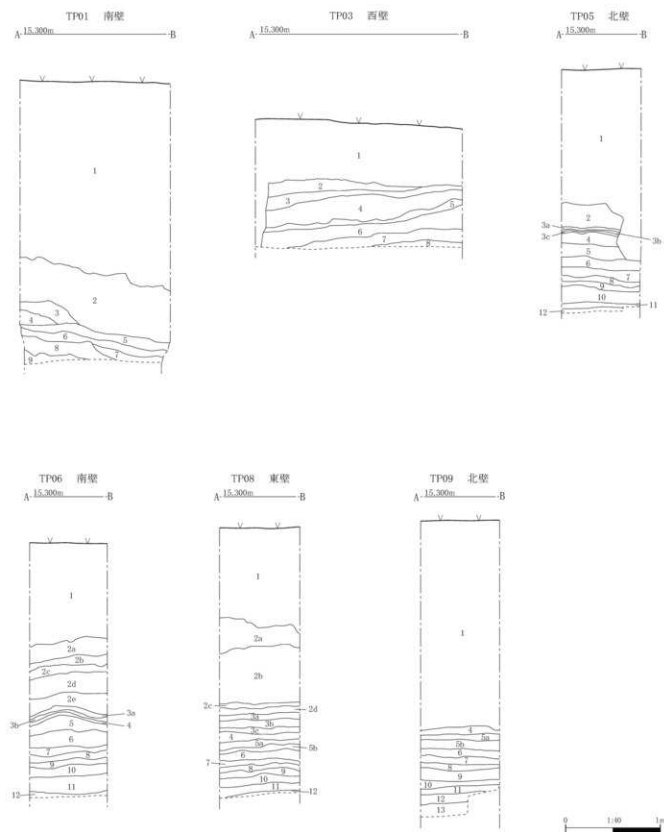


図50 福利厚生施設地点土層断面図

表 22 福利厚生施設地点土層観察表(1)

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP 01	1						客土
	2	5YR4/8	赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	やや弱	
	3	7.5YR5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中	黒色の有機物を微量含む。
	4	7.5YR4/6	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	5	7.5YR4/2	灰褐色	粘土	強	やや強	黒色の有機物を含む(局所的に黒味が強くなっている)。
	6	7.5YR4/6	褐色	粘土	強	やや強	
	7	7.5YR5/4	にぶい褐色	極細粒砂	中	中	
	8	7.5YR3/2	黒褐色	粘土	強	強	炭化物(φ1~3mm)を微量含む。
	9	7.5YR5/3	にぶい褐色	粘土	強	強	
TP 03	1						客土
	2	10YR2/1	黒色	シルト	やや弱	中	上部にTa-a含む。
	3	7.5YR3/4	暗褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
	4	5YR3/4	暗赤褐色	中粒砂	弱	弱	
	5	7.5YR4/6	褐色	シルト	中	中	
	6	7.5YR5/3	にぶい褐色	シルト	中	中	
	7	2.5YR4/6	オリーブ褐色	極細粒砂質シルト	やや強	やや強	
8	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	強	中		
TP 05	1						客土
	2	7.5YR4/6	褐色	シルト質極細粒砂	やや強	やや強	
	3a	7.5YR4/3	褐色	粘土	強	やや強	
	3b	7.5YR3/1	黒褐色	粘土	強	強	
	3c	7.5YR4/3	褐色	粘土	強	強	
	4	10YR4/6	褐色	極細粒砂	やや弱	中	
	5	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土	中	やや強	
	6	7.5YR5/4	にぶい褐色	極細粒砂	弱	やや弱	
	7	2.5Y5/4	黄褐色	極細粒砂質シルト	やや弱	やや弱	
	8	10YR3/2	黒褐色	粘土	強	やや強	
	9	2.5Y5/4	黄褐色	粘土質シルト	強	中	
	10	7.5YR4/6	褐色	細粒砂	弱	弱	
11	7.5YR4/3	褐色	粘土	強	やや強		
12	10YR3/4	暗褐色	粘土	強	やや強	遺物包含層	
TP 06	1						客土
	2a	5YR3/4	暗赤褐色	中粒砂	弱	弱	
	2b	7.5YR5/4	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
	2c	7.5YR4/4	褐色	極細粒砂	中	中	
	2d	10YR4/6	褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
	2e	7.5YR4/6	褐色	シルト	やや強	中	
	3a	5YR3/4	暗赤褐色	粘土	強	やや強	
	3b	7.5YR5/3	にぶい褐色	粘土	中	やや弱	
	4	2.5Y5/4	黄褐色	粘土	強	中	
	5	7.5YR5/4	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
	6	2.5Y5/4	黄褐色	極細粒砂	中	中	
	7	10YR4/4	褐色	粘土	強	やや強	
	8	10YR3/2	黒褐色	粘土	強	やや強	
	9	7.5YR4/6	褐色	粘土質シルト	強	やや強	
10	5Y4/4	暗オリーブ色	細粒砂	弱	やや弱		
11	7.5YR5/6	明褐色	粘土	強	やや強		
12	10YR3/4	暗褐色	粘土	強	やや強	遺物包含層	
TP 08	1						客土
	2a	5YR3/4	暗赤褐色	中粒砂	弱	弱	
	2b	7.5YR4/6	褐色	シルト質極細粒砂	中	やや弱	
	2c	7.5YR5/6	明褐色	粘土	強	やや強	
	2d	7.5YR4/6	褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	3a	7.5YR4/3	褐色	粘土	強	中	7.5YR6/4にぶい褐色粘土の薄層含む。
	3b	7.5YR3/2	黒褐色	粘土	強	やや強	
	3c	7.5YR5/4	にぶい褐色	粘土	やや強	やや強	
	4	7.5YR4/6	褐色	極細粒砂	弱	やや弱	
	5a	7.5YR5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	5b	7.5YR4/3	褐色	粘土	中	中	
	6	7.5YR5/4	にぶい褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	7	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質粘土	やや強	中	
	8	10YR3/2	黒褐色	粘土	やや強	やや強	7.5YR4/4褐色粘土の薄層含む。
9	7.5YR5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強		
10	7.5YR4/6	褐色	細粒砂	やや弱	やや弱		
11	7.5YR5/4	にぶい褐色	粘土	強	中		
12	7.5YR3/4	暗褐色	粘土	強	やや強	遺物包含層	

表 23 福利厚生施設地点土層観察表(2)

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP 09	1						客土
	4	7.5YR4/6	褐色	極細粒砂	弱	やや弱	
	5a	7.5YR5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	5b	7.5YR4/3	褐色	粘土	中	中	
	6	7.5YR5/4	にぶい褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	7	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質粘土	やや強	中	
	8	10YR3/2	黒褐色	粘土	やや強	やや強	7.5YR4/4 褐色粘土の薄層含む。
	9	7.5YR5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	10	7.5YR4/6	褐色	細粒砂	やや弱	やや弱	
	11	7.5YR5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	12	7.5YR3/4	暗褐色	粘土	強	やや強	遺物包含層。
	13	7.5YR3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強	

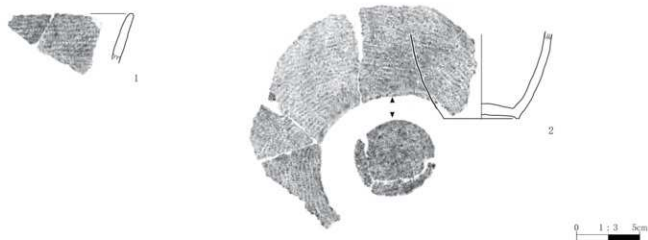


図 51 福利厚生施設地点出土の土器実測図及び拓影図

表 24 福利厚生施設地点出土土器観察表

神岡 番号	総合 番号	器種	部位	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	器面調整		時期	層位	遺物番号	写真 番号	備考
								外面	内面					
51-1	-	深鉢	口縁部	-	-	-	24.3	縄文(横)		縄文	301-128 Gr. TP 05 12層	1	14-1	口唇に縄文痕。
51-2	-	深鉢	胴~底部	-	-	6.0	158.6	縄文(横, 斜)		縄文	306-127 Gr. TP 08 12層	35	14-2	底部は上げ底状、整形崩あり。

石、敲石は安山岩である。礫はすべて安山岩であった。

TP 06 から出土した遺物は、石器 4 点 (26.0 g)、礫 1 点 (61.2 g) である。12 層から出土した。石器はすべて剥片である。剥片に利用されている石材は、黒曜石が 2 点 (23.9 g)、硬質頁岩が 2 点 (2.0 g) である。礫は安山岩であった。

TP 08 から出土した遺物は、土器 1 点 (160.6 g)、石器

2 点 (9.1 g) である。12 層から出土した。土器は深鉢で、胴部から底部にいたるものである。石器はすべて剥片で、利用されている石材は、黒曜石が 1 点 (1.4 g)、硬質頁岩が 1 点 (7.7 g) である。

TP 09 から出土した遺物は、土器 9 点 (50.9 g)、石器 7 点 (35.3 g)、礫 2 点 (54.5 g) である。12 層から出土した。土器は深鉢で、口縁部 1 点 (2.1 g)、胴部 6 点 (47.4

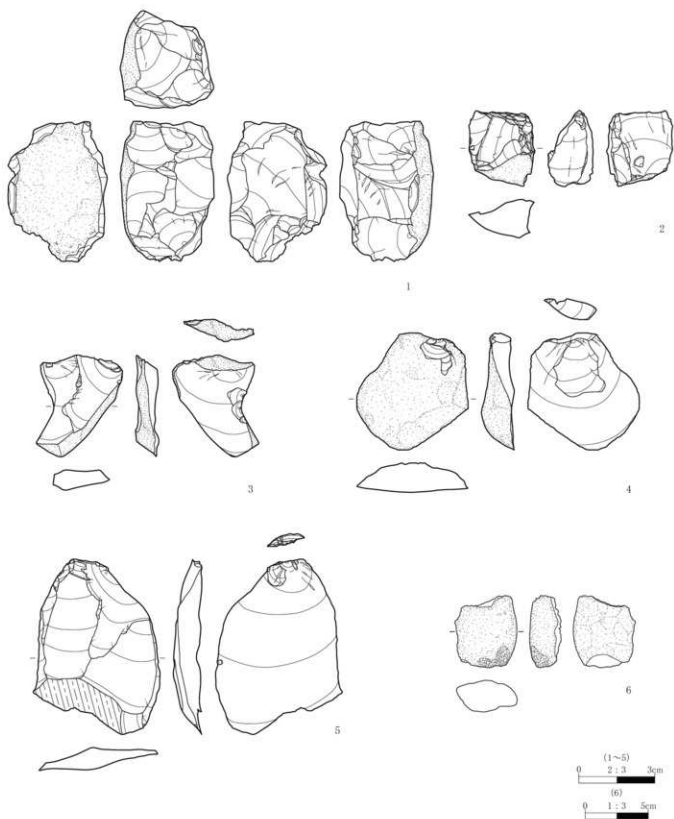


図 52 福利厚生施設地点出土の石器実測図

表 25 福利厚生施設地点出土石器観察表

陣岡 番号	遺物 番号	大タグリッド	中タグリッド	小タグリッド	層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	焼熟	遺存状態	自然面の状態	写真 番号	
52-1	16	201-128	24	1	TP05	12層	石核	チャート	5.5	3.7	3.9	88.3	—	—	転覆面	14-3
52-2	41	205-128	10	3	TP09	12層	楔形石器	チャート	3.0	2.6	1.8	11.2	—	—	転覆面	14-4
52-3	15	201-128	23	2	TP05	12層	剥片	硬質頁岩	4.0	3.4	0.9	8.9	—	—	転覆面	14-5
52-4	14	201-128	23	2	TP05	12層	剥片	珪質岩	4.6	4.4	1.3	25.2	—	—	転覆面	14-6
52-5	28	202-126	20	4	TP06	12層	剥片	黒曜石	6.9	5.0	1.1	23.4	—	—	角礫面	14-7
52-6	11	201-128	24	3	TP05	12層	巖石	安山岩	5.6	4.8	2.5	70.0	—	1/2欠	転覆面	14-8

g)、部位不明2点(1.2g)である。石器は楔形石器1点(11.1g)、剥片5点(24.1g)、砕片1点(0.1g)である。利用されている石材は、楔形石器がチャート、剥片は黒曜石が3点(2.9g)、硬質頁岩が2点(21.1g)、砕片はすべて黒曜石である。礫は安山岩が1点(4.6g)、砂岩が1点(49.8g)であった。

図51-1はTP05から出土した、口縁部土器資料である。外面に縄文が施文されている。図51-2はTP08から出土した、底部土器資料である。外面に縄文が施文されている。図示したもの以外の資料も含め、本地点で出土している土器は、隣接する中央道路共同溝地点V-1~3層(吉崎編1995)からの出土資料と共通するものであり、それらと同時期、すなわち縄文初期頭のものだと判断される。図52-1はチャート製石核で、TP05から出土した。図52-2はチャート製楔形石器で、TP09から出土した。図52-3~6は剥片で、硬質頁岩・珪質岩・黒曜石・安山岩等が用いられている。5は角礫面を残しているが、それ以外の資料の自然面はいずれも転覆面である。

k. 獣医学部動物舎改修工事(1715)

獣医学部動物舎の周囲で改修に伴うガス管・排水管・パンクリーナー撤去・油タンク撤去のための工事が実施された。58m²の工事予定面積のうち33m²が立会調査の対象となった。地表下0.9~1.5mの深さまで掘削された。今回の工事による掘削は、過去の工事等によって掘削がなされた範囲にとどまっており、自然堆積物を新たに掘削することはなかった。遺物・遺構は検出されなかった。

l. 変電所旧引き込みケーブル点検業務工事(1716)

中央変電所の南西側でケーブル検査のための掘削工事が実施された。4.0m²の工事予定地内に関して、立会調査を実施した。地表下1.5~1.9mの深さまで掘削された。今回の工事による掘削は、過去の工事等によって掘削がなされた範囲にとどまっており、自然堆積物を新たに掘削することはなかった。遺物・遺構は検出されなかった。

(高倉)



A. 調査区遠景 (南東より)



B. 調査の様子1 (TP01: 東より)



C. TP01 南壁 (北より)



D. TP03 西壁 (東より)



E. 調査の様子2 (TP05: 南東より)



G. TP05 北壁 (南より)



F. TP05 遺物出土状況 (南より)

写真 12 福利厚生施設地点の調査(1)



A. TP06 遺物出土状況 (南より)



B. TP06 南壁 (北より)



C. TP08 遺物出土状況 (西より)



D. TP08 東壁 (西より)



E. 調査の様子3 (TP09: 北より)



F. TP09 遺物出土状況 (南より)



G. TP09 北壁 (南より)

写真13 福利厚生施設地点の調査[2]

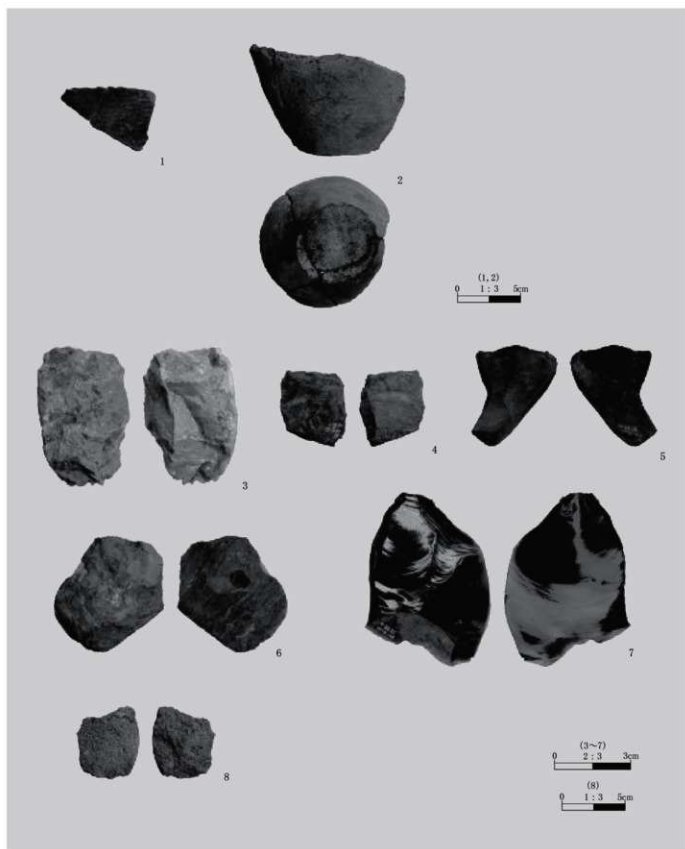


写真 14 福厚厚生施設地点出土遺物



A. 事務局本館植栽復旧工事（西より）1701



B. 事務局本館植栽復旧工事（北より）1701



C. 北大病院保育園ポプラ給水管改修工事
（北西より）1706



D. 北大病院保育園ポプラ給水管改修工事
（北西より）1706



E. 農学部園場給水管更新工事（南より）1708



F. 農学部園場給水管更新工事（北より）1708



G. モデルパーキングフェンス改修工事
（西より）1711



H. 工学部屋外ガス管修理工事（北より）1712

第 2 部 平成 29 年度年次事業報告

2-1 調査活動

1. 緊急調査—本発掘・確認・立会調査及び慎重工事

平成29年度に北海道大学構内では、本発掘調査1件、確認調査2件、立会調査10件、慎重工事3件が行われた。本発掘調査に関しては第1部2章、確認・立会調査に関しては同3章を参照いただきたい。

2. 計画調査—基盤情報整備

平成27年からの5年間を第一次計画調査期間として、計画的な発掘調査のための基盤情報の整備に着手した。基盤情報の整備では、昭和55年度～平成28年度までの調査活動によって得られた各種データ（遺構・遺物の種類・位置情報、地層の堆積状態、埋没河道の位置・広がり、既調査深度など）をキャンパス地図に関連付けて、データ類の一元的検索システムの構築を進めている。

これらの基盤情報整備の成果を踏まえて、平成28年度は南キャンパス理学部地点、平成29年度は中央キャンパス教育学部北地点の発掘調査を実施した。本調査に関しては第1部2章を参照いただきたい。

2-2 教育普及活動

1. 北海道大学埋蔵文化財調査センター展示室

a. 常設展示

開館時間は午前9時から午後4時30分まで、休館日は毎週土曜・日曜日、年末年始（12月29日～1月3日）、祝日である。入館料は無料である。

2. 企画展示

a. 第6回企画展示「サケの考古学」

表26 常設展示資料一覧表

展示場所	展示内容	展示物
ケース1	縄文文化地層 ・新石器文化	土器11点、石器33点、パナール1点
ケース2	縄文文化	土器7点、石器84点、パナール1点
ケース3	縄文文化	土器15点、石器66点、パナール2点
ケース4	縄文文化	埴外印土（筒玉取り）
ケース5	縄文文化	土器31点、石器16点、土製品1点、パナール1点
ケース6	縄文文化	土器10点、石器26点、土製品9点、石製品10点、鉄製品2点、骨製品1点、木製品6点、自然遺物12点、パナール8点
ケース7	縄文文化	土器29点、鉄製品1点、パナール7点
ケース8	企画展示	傘下足形
ケース9	企画展示	傘下足形



写真16 第8回企画展示の様子

開催期間：平成29年4月3日～平成29年7月16日
(土日祝日を除く72日間)

入場者数：765人

サケの漁労に焦点をあて、出土した漁労具やサケの骨などを展示した。資料の借用には札幌市教育委員会、千歳市教育委員会のご協力をいただいた。

展示物：サケ骨（恵迪寮地点出土資料）、木製杭・漁具（恵迪寮地点出土資料）、鉄製漁具（恵迪寮地点出土資料）、写真、パネル

b. 第7回企画展示「掻器と皮鞋し」

開催期間：平成29年7月21日～平成29年12月28日
(土日祝日を除く110日間)

入場者数：903人

皮革生産のために必要となる皮鞋しにかかわる出土道具類の紹介をおこなった。あわせてカムチャッカの民具の展示もおこなった。資料の借用には北海道大学大学院文学研究科の高瀬克範氏のご協力をいただいた。

展示物：石器（人文・社会学総合教育研究棟地点、創成科学研究棟南地点、学生部体育館地点、ポプラ並木東地区地点、工学部共用実験研究棟地点出土資料）、カムチャッカ半島民具（木製柄と装着された掻器）、写真、パネル

c. 第8回企画展示「平成29年度 北海道大学埋蔵文化財調査センター調査成果速報展」

開催期間：平成30年3月6日～平成30年12月19日
平成29年度に行った本発掘調査や確認調査で検出された遺構・遺物を紹介した。年度をまたがった開催であったため、詳細については次年度に報告する。

展示物：土器（医学部百年記念館地点、福利厚生施設地点）、石器（福利厚生施設地点）、パネル

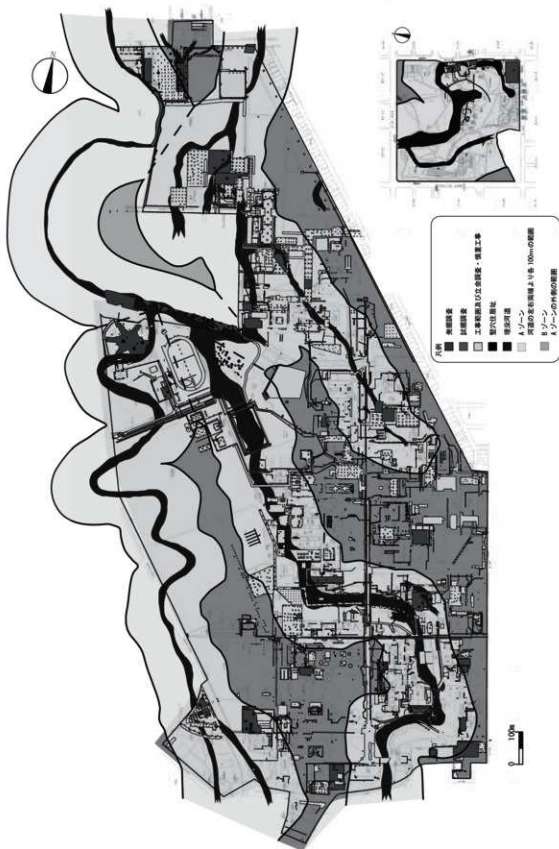


図 53 北大札幌キャンパス内のゾーン区分

3. 北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター

北大構内から発見された考古資料や関連科学の研究成果について解説した特集とともに、調査センター主催の行事案内を掲載している。ニュースレターは、調査センターのホームページで閲覧、あるいはPDFをダウンロードできる。平成29年度は第27号～第29号を刊行した。第27号(平成29年8月発行)は、「掻器と皮靴し」と題し、北大構内の遺跡から出土している掻器について紹介した。第28号(平成30年2月発行)は、「北大キャンパスの地底世界へアースダイビング」と題し、北大構内の地底世界に重層的にひろがる遺跡の様子について紹介した。第29号(平成30年3月発行)は、「暗渠(あんきょ)」と題し、近現代の暗渠について紹介した。

4. 遺跡トレイルウォーク

大学構内遺跡を一般市民に周知していただくために、毎年2回、テーマを設定しキャンパス内に設置したサテライトサインを訪ねるトレイルウォークを開催している。平成29年度は7月9日に第17回、10月15日に第18回を実施した。第17回は「セロンベツ川とその川沿いの遺跡をたどる」をテーマに、農学部から農場にかけてのエリアでセロンベツ川の名残がわかる地形の観察を行うとともに、その周辺に残されている遺跡を見学していった。参加者は77名であった。第18回は「搾文期における集落と墓」をテーマに、発掘調査が行われていた医学部百年記念館地点を中心に、その周辺で搾文文化の集落と墓が発見されている地点を見学していった。参加者は75名であった。

5. 発掘調査見学会

北海道大学構内で発掘調査を実施した際には、進捗状況に応じて現地説明会を開催している。平成29年度は、医学部百年記念館地点(10月3日(火)1回目12:30～13:00、2回目13:00～13:30開催)の発掘調査現地説明会を実施した。参加者は67名であった。現地説明会では、調査中の埋没河道やその周辺で確認された遺構・遺物の出土状況の解説を行うとともに、出土遺物についても紹介した。

6. 調査成果報告会

北海道大学構内で行われた発掘調査の成果を紹介するとともに、考古学関連分野の専門家による特別講演を実施している。第10回目の平成29年度は、下記の内容で平成30年3月17日に開催し、参加者は76名であった。



写真17 第17回トレイルウォークの様子



写真18 第10回調査成果報告会の様子

報告会に関する要旨集を作成し、当日、配布している。また、報告会の休憩中、及び終了後に第5回企画展示「平成29年度 調査成果速報展」について、センター員が解説を行った。

第1部(調査成果報告)

- ・埋蔵文化財調査センターによる2017年度調査の概要
報告者 高倉 純
(北海道大学埋蔵文化財調査センター)
 - ・「K39遺跡教育学部北地点の調査成果」
報告者 本山志郎
(北海道大学埋蔵文化財調査センター)
 - ・「K39遺跡医学部百年記念館地点の調査成果」
報告者 守屋豊人
(北海道大学埋蔵文化財調査センター)
- #### 第2部(特別講演)
- ・「道央部の遺跡における花粉分析の成果」
講演者 山田悟郎
(元北海道開拓記念館)

7. 資料利用

a. 資料貸出

- ・札幌国際大学縄文世界遺産研究室
展覧会「札幌の縄文文化」展示のため
資料：遺跡保存庭園および植物園内の遺跡写真8点
期間：平成29年5月1日～8月18日
- ・公益財団法人北海道埋蔵文化財センター
北海道立埋蔵文化財センター企画展示「北海道遺跡百選 シブツナイと北の古代」展示のため
資料：K39遺跡恵迪寮地点「テシ」調査状況写真1点
期間：平成29年11月20日～平成30年3月16日

b. 資料説明

- ・北海道大学総合博物館
「一般教育演習『北大エコキャンパスの自然と歴史』」
場所：埋蔵文化財調査センター展示室
日時：平成29年5月26日
- ・北海道大学国際本部グローバル教育専門推進センター
「多文化交流科目『北海道再発見一博物館で北海道を知る』」
場所：埋蔵文化財調査センター展示室
日時：平成29年6月12日
- ・幌内第一町内会
「北大構内の縄文文化見学」
場所：埋蔵文化財調査センター展示室
日時：平成29年6月30日
- ・西区民センター
「西区民センター主催講座『札幌の遺跡を知る、訪ねる』」
場所：埋蔵文化財調査センター展示室
日時：平成29年7月4日
- ・札幌アイヌ協会
「札幌市アイヌ文化体験講座『アイヌ文化の遺跡めぐりイン北大』」
場所：埋蔵文化財調査センター展示室
日時：平成29年10月7日
- ・幌内第四町内会
「北海道大学の埋蔵文化財を知る」
場所：埋蔵文化財調査センター展示室
日時：平成29年11月1日
- ・北海道大学国際本部グローバル教育専門推進センター
「多文化交流科目『北海道再発見一博物館で北海道を知る』」
場所：埋蔵文化財調査センター展示室
日時：平成29年11月27日

2-3 統計・資料

1. 入館データ

a. 見学団体

- ・放送大学学生会「北大キャンパス散策」10名
日時：5月26日
- ・札幌まるやま自然学校「ここいっく放課後自然体験活動」4名
日時：9月29日

b. 月別開館日数及び入館者数

表 27 月別開館日数及び入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	30	20	22	30	22	30	21	20	30	19	19	21	244日
入館者数	87	270	271	210	271	133	277	131	35	69	70	158	1979人

2. 組織・構成

a. 埋蔵文化財運営委員会

- | | | |
|-----|-------|-----------------|
| 委員長 | 小杉 康 | (文学研究科 教授) |
| 委員 | 皆川 一志 | (理事) |
| | 高瀬 克範 | (文学研究科 准教授) |
| | 増田 隆一 | (理学研究院 教授) |
| | 波部 要一 | (工学研究院 教授) |
| | 佐野 雄三 | (農学研究院 教授) |
| | 山本 正伸 | (地球環境科学研究院 准教授) |
| | 湯浅万紀子 | (総合博物館 教授) |

b. 調査専門部会

- | | | |
|-----|-------|-----------------|
| 部会長 | 小杉 康 | (文学研究科 教授) |
| 部会員 | 高瀬 克範 | (文学研究科 准教授) |
| | 増田 隆一 | (理学研究院 教授) |
| | 波部 要一 | (工学研究院 教授) |
| | 佐野 雄三 | (農学研究院 教授) |
| | 山本 正伸 | (地球環境科学研究院 准教授) |
| | 湯浅万紀子 | (総合博物館 教授) |

c. 北海道大学埋蔵文化財調査センタースタッフ

- | | | |
|-------|-------|------------|
| センター長 | 小杉 康 | (文学研究科 教授) |
| センター員 | 高倉 純 | (助教) |
| | 守屋 豊人 | (助教) |
| | 坂口 隆 | (特定専門職員) |
| | 本山 志郎 | (特定専門職員) |
| | 佐藤 寿子 | (技能補助員) |

3. 受領刊行物一覧

表 28 受領刊行物一覧表(1)

[通内]	
1.	(公財)北海道埋蔵文化財センター 『調査年報 29 平成 28 年度』
2.	(公財)北海道埋蔵文化財センター 『調査年報 30 平成 29 年度』
3.	(公財)北海道埋蔵文化財センター 『ユネタ (web) 39』
4.	(公財)北海道埋蔵文化財センター 『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調) 厚真町書庫5遺跡 富里1遺跡 富沢10遺跡 豊丘2遺跡』
5.	(公財)北海道埋蔵文化財センター 『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第342集 根室市長根53遺跡』
6.	(公財)北海道埋蔵文化財センター 『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調) 厚真町上磯内4遺跡 上磯内5遺跡』
7.	(公財)北海道埋蔵文化財センター 『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調) 厚真町上キネシ3遺跡』
8.	(公財)北海道埋蔵文化財センター 『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調) 下川町上各客8遺跡』
9.	(公財)北海道埋蔵文化財センター 『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調) 千歳市トブナイ2遺跡 トカベツ2遺跡』
10.	(公財)北海道埋蔵文化財センター 『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調) 千歳市根志越5遺跡』
11.	(公財)北海道埋蔵文化財センター 『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調) 木古内町泉沢6遺跡』
12.	北海道立埋蔵文化財センター 『北海道立埋蔵文化財センター重要遺跡確認調査報告書第13集』
13.	北海道立埋蔵文化財センター 『年報 18 平成 28 (2016) 年度』
14.	厚真町教育委員会 『厚真ダム建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 15 厚真町上磯内2遺跡』
15.	厚真町教育委員会 『厚真ダム建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 16 厚真町一里沢遺跡』
16.	厚真町教育委員会 『厚真ダム建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 15 厚真町ショロマ1遺跡①』
17.	厚真町教育委員会 『厚真ダム建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 15 厚真町上磯内1遺跡②』
18.	いしかり砂丘の風資料館 『いしかり砂丘の風資料館紀要第7巻』
19.	いしかり砂丘の風資料館 『エスチュアリー No.53 いしかり砂丘の風資料館だより』
20.	いしかり砂丘の風資料館 『エスチュアリー No.54 いしかり砂丘の風資料館だより』
21.	いしかり砂丘の風資料館 『エスチュアリー No.55 いしかり砂丘の風資料館だより』
22.	浦幌町立博物館 『浦幌町立博物館紀要第17号』
23.	浦幌町立博物館 『浦幌町立博物館年報第17号』
24.	北網走北見文化センター 『北網走北見文化センター年報 平成 28 年度』
25.	公益財団法人アイヌ文化振興・研究促進機構 『木彫家藤戸竹音の世界』
26.	札幌国際大学縄文世界遺産研究室 『年報1 縄文』
27.	札幌市教育委員会 『札幌市文化財調査報告書 104 K441 遺跡 第3次調査』
28.	札幌市教育委員会 『札幌市文化財調査報告書 105 M504 遺跡』
29.	札幌市教育委員会 『市内遺跡発掘調査報告書 9 平成 28 年度 調査報告書』
30.	樺戸町立博物館 『樺戸町立博物館報告書 29 号』
31.	千歳市教育委員会 『千歳市文化財調査報告書 42 つくさみイ目遺跡(第3次調査)』
32.	根室市歴史と自然の資料館 『根室市歴史と自然の資料館紀要第29号』
33.	根室市歴史と自然の資料館 『くるまじい 根室市歴史と自然の資料館だより 2017.8 No.32』
34.	函館市教育委員会 『函館市石川3遺跡』
35.	函館市教育委員会 『史跡加ノ島遺跡』
36.	函館市教育委員会 『一般財団法人函館歴史文化振興財団発掘調査報告書第1報 函館市電電会社会館遺跡』
37.	函館市教育委員会 『一般財団法人函館歴史文化振興財団発掘調査報告書第2報 函館市日町A 遺跡①』
38.	新報別冊教育委員会 『新報別冊アタラス遺跡(Ⅲ)』
39.	美幌町教育委員会 『美幌町埋蔵文化財各種発掘調査報告書』
40.	北斗市教育委員会 『北斗市村前ノ沢遺跡』
41.	北海道博物館 『北海道博物館一括資料目録 第1集 弥衣コレクション』
42.	北海道博物館 『森のちやれんがニュース vol.8 (2017 夏)』
43.	北海道博物館 『森のちやれんがニュース vol.9 (2017 秋)』
44.	北海道博物館 『森のちやれんがニュース vol.10 (2017 冬)』
45.	むかわ町教育委員会 『町内遺跡所在調査発掘調査報告書(東雲1遺跡・東雲チヤンシ跡)』
46.	むかわ町教育委員会 『町内遺跡所在調査発掘調査報告書(トロスチャシ跡・東雲1遺跡)』
47.	羅臼町教育委員会 『羅臼町文化財報告書 28 号青古丹第2チヤシ跡・ボン根崎田石原遺跡』
48.	利尻町立博物館 『利尻紀要 利尻町立博物館年報第37号』
[通外]	
49.	青森県史編さん考古部会 『青森県史 資料編 考古1 旧石器 縄文草創期～中期』
50.	青森県史編さん考古部会 『青森県史 通史編1 原始 古代 中世』
51.	東北大学埋蔵文化財調査室 『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告 2015』
52.	東北大学埋蔵文化財調査室 『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告 6 磐台城跡二の丸北方家原敷地区第18 境内』
53.	弘前大学入文学部北日本考古学研究所 『弘前大学の考古学』
54.	弘前大学入文学部北日本考古学研究所 『八郎洞遺跡における縄文時代集落の研究』
55.	弘前大学入文学部北日本考古学研究所 『発掘調査委員会 『ニュースレター-V』』
56.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第662集 御湯遺跡発掘調査報告書』
57.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第663集 千歳川遺跡発掘調査報告書』
58.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第664集 藤津跡1遺跡発掘調査報告書』
59.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第665集 赤坂田遺跡発掘調査報告書』
60.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第666集 越田松尾根1遺跡発掘調査報告書』
61.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第667集 タク井遺跡発掘調査報告書』
62.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第668集 川平川遺跡発掘調査報告書』
63.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第669集 西野① 遺跡発掘調査報告書』
64.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第670集 釜谷遺跡発掘調査報告書』
65.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第671集 (二)分館 中村遺跡発掘調査報告書』
66.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第672集 九重沢川・平野原遺・板敷遺・新根遺宮森遺跡発掘調査報告書』
67.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第673集 西平内1遺跡発掘調査報告書』
68.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第674集 上泉川遺跡発掘調査報告書』

表 29 受領刊行物一覧表(2)

69.	(公財)若手組文化振興事業団埋蔵文化財センター 「若手組文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第675集 荷丹日影Ⅱ発掘発掘調査報告書」
70.	(公財)若手組文化振興事業団埋蔵文化財センター 「若手組文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第676集 平成28年度発掘調査報告書」
71.	(公財)若手組文化振興事業団埋蔵文化財センター 「紀要 第36号」
72.	(公財)若手組文化振興事業団埋蔵文化財センター 「年報 平成28年度」
73.	一般財団法人美州市文化振興財団 「美州市若手組美州市埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書第15集 石行遺跡、小十文字遺跡」
74.	国立大学法人平泉大学平泉文化財センター 「若手大学 平泉文化財センター年報 VOL.5」
75.	宮古市教育委員会 「宮古市埋蔵文化財調査報告書80 八木駒込Ⅰ遺跡、八木駒込Ⅱ遺跡」
76.	宮古市教育委員会 「宮古市埋蔵文化財調査報告書81 鎌ノ沢Ⅰ遺跡、山口駒込Ⅰ遺跡、山口駒込Ⅱ遺跡」
77.	宮古市教育委員会 「宮古市埋蔵文化財調査報告書82 赤塚東遺跡」
78.	宮古市教育委員会 「宮古市埋蔵文化財調査報告書83 千徳城跡跡群」
79.	宮古市教育委員会 「宮古市埋蔵文化財調査報告書84 黒森町Ⅰ遺跡」
80.	宮古市教育委員会 「宮古市埋蔵文化財調査報告書85 菅ノ沢遺跡・榎ⅠⅡ遺跡」
81.	宮古市教育委員会 「宮古市埋蔵文化財調査報告書86 千徳城跡跡群」
82.	宮古市教育委員会 「宮古市埋蔵文化財調査報告書87 重茂川遺跡跡群 重茂小学校校設グラウンド整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書(第3次発掘調査)」
83.	宮古市教育委員会 「宮古市埋蔵文化財調査報告書88 重茂川遺跡跡群 重茂川遺跡跡群 重茂川地区漁業集落防災機能強化事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書(第4次発掘調査)」
84.	宮古市教育委員会 「宮古市埋蔵文化財調査報告書89 重茂川遺跡跡群 重茂川集落共同築堤給油所建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書(第3次発掘調査)」
85.	洋野町教育委員会 「埋蔵文化財調査報告書第3集 プツノ遺跡発掘発掘調査報告書」
86.	(公益)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 「研究紀要 第25号」
87.	(公益)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 「埋蔵文化財センター年報(平成28年度版)」
88.	(公益)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 「熊本県埋蔵文化財センターだより2017年9月」
89.	(公益)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 「熊本県埋蔵文化財センターだより2018年2月」
90.	熊本県教育委員会 「熊本県埋蔵文化財調査報告書第384集 熊本県埋蔵文化財保護行政年報 平成27年度(2015-20)」
91.	熊本県教育委員会 「熊本県埋蔵文化財調査報告書第385集 熊本城跡・熊本遺跡」
92.	熊本県教育委員会 「熊本県埋蔵文化財調査報告書第386集 業宮宮内遺跡」
93.	熊本県教育委員会 「熊本県埋蔵文化財調査報告書第387集 坂戸宮内城古墳群」
94.	熊本県教育委員会 「熊本県埋蔵文化財調査報告書第388集 阿治遺跡・阿治の原遺跡(第1分冊)」
95.	熊本県教育委員会 「熊本県埋蔵文化財調査報告書第388集 阿治遺跡・阿治の原遺跡(第2分冊)」
96.	公益財団法人千葉県教育振興財団 「研究連絡誌第78号」
97.	公益財団法人千葉県教育振興財団 「房総の文化財 VOL.56」
98.	公益財団法人千葉県教育振興財団 「千葉県教育振興財団文化財センター年報No.42—平成28年度—」
99.	葛飾区教育委員会 「平成28年度葛飾区埋蔵文化財年報」
100.	駒澤大学考古学研究室 「駒澤神社古墳第1次発掘調査概報」
101.	駒澤大学考古学研究室 「駒澤考古 第42号」
102.	東京都教育委員会 「東京都調布市 史跡下田遺跡地帯発掘報告書」
103.	東北大学 「文部科学省科学研究費補助金(新学術領域研究)2016-2020 パレ第1回研究大会 パレオアジア文化史—アジア新文化形成プロセスの総合的研究」
104.	東京大学総合研究博物館 「文部科学省科学研究費補助金(新学術領域研究)2016-2020 パレオアジアにおけるホモ・セピエンス定着プロセスの地形的・生態学的枠組み構築」
105.	東京大学総合研究博物館 「文部科学省科学研究費補助金「スズメユースター 第4号」 SEEDS CONTACT」
106.	明治大学博物館 「明治大学博物館研究報告 第22号」
107.	(公財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 「奈沢区No.52遺跡(六浦二丁目所在やぐら)」
108.	(公財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 「上ノ子義経遺跡(瀬戸21番地やぐら) 発掘調査報告書」
109.	(公財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 「奇兵衛遺跡本発掘調査報告書」
110.	(公財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 「埋文よこはま34」
111.	(公財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 「埋文よこはま35」
112.	(公財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 「泉中央公園発掘発掘調査報告書」
113.	(公財)横浜市ふるさと歴史財団 「産北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告書49 榎田原遺跡Ⅱ」
114.	公益財団法人富山県文化振興財団 「とやま発掘だより 平成28年度 発掘調査速報」
115.	公益財団法人富山県文化振興財団 「平成28年度埋蔵文化財年報」
116.	富山県埋蔵文化財センター 「富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」vol.138」
117.	富山県埋蔵文化財センター 「富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」vol.139」
118.	富山県埋蔵文化財センター 「富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」vol.140」
119.	富山県埋蔵文化財センター 「開所40周年記念特別展 遺跡保護のあゆみ」
120.	石川県小松市埋蔵文化財センター 「小松城跡発掘調査報告書Ⅱ」
121.	石川県小松市埋蔵文化財センター 「小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ」
122.	加賀市教育委員会 「加賀市埋蔵文化財報告書 第45巻 巻次3 因指定史跡八谷稲野跡確認調査報告書」
123.	加賀市教育委員会 「加賀市埋蔵文化財報告書 第46巻 加賀市指定史跡 大聖寺城跡、大聖寺寺山田泉跡 確認調査報告書」
124.	金沢大学文学部考古学研究室 「金沢大学考古学紀要 第38号」
125.	金沢大学埋蔵文化財調査センター 「金沢大学構内遺跡 内筒遺跡、室町・能岡遺跡」
126.	静岡県埋蔵文化財センター 「静岡県埋蔵文化財センター研究紀要第6号(2017)」
127.	静岡県埋蔵文化財センター 「ふじのくに 考古通信 Vol.13」
128.	静岡県埋蔵文化財センター 「ふじのくに 考古通信 Vol.14」
129.	名古屋大学 「文部科学省科学研究費補助金(新学術領域研究)2016-2020 パレ第2回研究大会 パレオアジア文化史—アジア新文化形成プロセスの総合的研究」
130.	名古屋大学平田地産環境研究所 「文部科学省科学研究費補助金(新学術領域研究)2016-2020 パレオアジアにおけるホモ・セピエンス定着期の気候変動と居住環境の解明」
131.	名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室 「東山72号発掘調査報告書」
132.	名古屋大学博物館 「文部科学省科学研究費補助金(新学術領域研究)2016-2020 パレオホモ・セピエンスのアジア定着期における行動様式の解明」
133.	名古屋大学文学研究科考古学研究室 「名古屋大学文学研究紀要 188」
134.	三重県埋蔵文化財センター 「平成28年度 三重県埋蔵文化財年報」
135.	京都大学文化財総合研究センター 「京都大学構内発掘調査研究年報2015年度」
136.	京都大学文化財総合研究センター 「京都大学文化財総合研究センター設立40周年記念展示「文化財発掘Ⅳ」
137.	同志社大学歴史資料館 「同志社大学歴史資料館年報第20号」
138.	同志社大学歴史資料館 「同志社大学歴史資料館研究報告第14集 本津川・淀川流域における淡生・古墳時代 集落・墳墓の動態に関する研究」
139.	国立民族博物館 「文部科学省科学研究費補助金(新学術領域研究)2016-2020 パレ人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の分子人類学的モデル構築」
140.	国立民族博物館 「文部科学省科学研究費補助金(新学術領域研究)2016-2020 パレ第3回研究大会 パレオアジア文化史—アジア新文化形成プロセスの総合的研究」

表 30 受領刊行物一覧表(3)

141.	大手前大学史学研究所 『大手前大学史学研究所紀要 第 11 号』
142.	公益財団法人山見大和古代文化研究協会 『研究紀要 第 21 集』
143.	奈良国立歴史考古学研究所 『桑原寺東塔基礎』
144.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良国立歴史考古学研究所年報 42 平成 27 年度 (2015 年度)』
145.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良県文化財調査報告書 第 171 集 大塚城跡』
146.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良県文化財調査報告書 第 172 集 藤原京石京十一条三坊・四坊』
147.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良県文化財調査報告書 第 173 集 法興寺南宮前道路 小阪榎木道跡』
148.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良県文化財調査報告書 第 174 集 太田道跡 第 7 次調査発掘調査報告書』
149.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良県文化財調査報告書 第 175 集 立花道跡』
150.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良県文化財調査報告書 第 176 集 藤原京石京八条二坊・九条三坊 紀寺跡』
151.	唐招提寺 奈良国立歴史考古学研究所 『奈良県文化財調査報告書 第 177 集 史跡唐招提寺土境内』
152.	奈良国立歴史考古学研究所 『国家形成期の畿内における馬の飼育と利用に関する基礎的研究』
153.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良国立歴史考古学研究所紀要 考古学論叢第 40 冊』
154.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良国立歴史考古学研究所調査報告書 第 121 冊 観音寺本馬道跡遺 (観音寺 1 区) (写真図版編)』
155.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良国立歴史考古学研究所調査報告書 第 121 冊 観音寺本馬道跡遺 (観音寺 1 区) (本文編)』
156.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良国立歴史考古学研究所調査報告書 第 122 冊 石鐘 奈良公園・興隆寺跡』
157.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良国立歴史考古学研究所調査報告書 第 123 冊 中夜道跡 1』
158.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良国立歴史考古学研究所調査報告書 第 124 冊 藤原京石京十一条一坊・左京十一条一坊』
159.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良国立歴史考古学研究所調査報告書 第 125 冊 葛伝山丸墓』
160.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良県道跡調査概報 2015 年度 (第二分冊)』
161.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良県道跡調査概報 2016 年度 (第二分冊)』
162.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良県道跡調査概報 2017 年度 (第一分冊)』
163.	奈良国立歴史考古学研究所 『藤ノ木古墳出土品からみた考古系博物館における展示・公開に関する総合的研究』
164.	奈良国立歴史考古学研究所 『青陵第 147 号』
165.	奈良国立歴史考古学研究所 『青陵第 148 号』
166.	奈良国立歴史考古学研究所 『青陵第 149 号』
167.	奈良国立歴史考古学研究所 『青陵第 150 号』
168.	奈良国立歴史考古学研究所 『青陵第 151 号』
169.	奈良国立歴史考古学研究所 『青陵第 152 号』
170.	奈良国立歴史考古学研究所 『青陵第 153 号』
171.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良国立歴史考古学研究所年報 43 平成 28 年度 (2016 年度)』
172.	奈良国立歴史考古学研究所 『古墳時代中期における甲冑生産組織の研究—「型紙」と製作工程の分析を中心として』
173.	奈良国立歴史考古学研究所 『奈良国立歴史考古学研究所紀要 考古学論叢第 41 冊』
174.	奈良国立歴史考古学研究所 『三次元計測を応用した青銅器製作技術からみた三角縁線鏡鍍の総合的研究』
175.	奈良大学文学部文化財学科 『文化財学報第三十五巻』
176.	鳥取県大田市教育委員会 『鳥山山谷地区・宗岡家地点・金森家地点 石見銀山』
177.	鳥取大学研究・学術情報機構 『鳥取大学研究・学術情報機構ミュージアム年報』
178.	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 No.58』
179.	岡山理科大学生物地誌学部考古学研究室 『佐山東山道跡第 6 次発掘調査概報』
180.	岡山理科大学地誌考古学研究室 『平山道跡考古第 4 号』
181.	広島大学総合博物館 『広島大学総合博物館—ユースター—Vol.10 HUM-HUM (ふむふむ)』
182.	広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部刊 『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要第 8 号』
183.	山口大学埋蔵文化財資料館 『山口大学埋蔵文化財調査研究年報 XX』
184.	山口大学埋蔵文化財資料館 『山口大学埋蔵文化財資料館通信第 27 号 『てらこや型文』』
185.	山口大学埋蔵文化財資料館 『埋蔵資料調査研究報告書 6 見島ジーンズ古墳群 第 123 号墳・大 152 号墳 (丙)・西部域 出土資料調査報告』
186.	徳島大学埋蔵文化財調査室 『徳島大学埋蔵文化財調査室—ニュースター—No.4』
187.	徳島大学埋蔵文化財調査室 『徳島大学埋蔵文化財調査報告書第 6 巻 常三島道跡 3』
188.	徳島大学埋蔵文化財調査室 『紀要 3』
189.	愛媛大学埋蔵文化財調査室 『愛媛大学埋蔵文化財調査報告書 愛媛大学埋蔵文化財調査室年報 2016 年度』
190.	Department of Archaeology, Faculty of Humanities, Kyushu University 『Excavations at Bor Owo and Khyar Kharach Sites』
191.	北九州市教育委員会 『北九州市文化財調査報告書第 147 集 御賀取道跡第 3 地点』
192.	北九州市教育委員会 『北九州市文化財調査報告書第 148 集 石田道跡第 3・4・5 地点』
193.	北九州市教育委員会 『北九州市文化財調査報告書第 149 集 城野道跡第 2・4 地点』
194.	北九州市教育委員会 『北九州市文化財調査報告書第 150 集 榊田道跡第 3 地点』
195.	北九州市教育委員会 『北九州市文化財調査報告書第 151 集 津田神社道跡第 2 地点』
196.	北九州市教育委員会 『北九州市文化財調査報告書第 152 集 高野山田道跡 (第 1・第 2 地点)』
197.	北九州市教育委員会 『北九州市文化財調査報告書第 153 集 馬廻道跡第 2 地点』
198.	北九州市教育委員会 『北九州市の民族芸能』
199.	九州大学大学院埋蔵文化財調査室 『九州大学埋蔵文化財調査室報告書 第 1 集 船崎道跡—HZK1601・1603・1604 地点—』
200.	宗慶市教育委員会 『むなかたの文化財 平成 20・21 年度文化財保護事業』
201.	宗慶市教育委員会 『むなかたの文化財 平成 22 年度文化財保護事業』
202.	宗慶市教育委員会 『宗慶市文化財調査報告書第 72 集 深田道跡群』
203.	宗慶市教育委員会 『因史跡田原石碕道跡整備事業 報告書』
204.	宗慶市教育委員会 『因史跡田原石碕道跡整備事業 概要編』
205.	宮崎市教育委員会 『宮崎市文化財調査報告書第 15 集 粟山道跡・下粟山道跡』
206.	宮崎市教育委員会 『宮崎市の歴史文化財について』
207.	宮崎市教育委員会 『宮崎市文化財調査報告書第 16 集 千原道跡群・伊古道跡群』
208.	熊本大学埋蔵文化財調査センター 『熊本大学埋蔵文化財調査センター年報 22』
209.	熊本大学埋蔵文化財調査センター 『熊本大学埋蔵文化財調査報告書 熊本大学境内道跡発掘調査報告書』
210.	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報 31』
211.	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書第 13 集 脇田亀ヶ原道跡 (鹿児島大学境内道跡群ケ田地区 8・9 区)』

参考・引用文献

白杵 勲編 2007

科学研究費補助金基盤研究 (B) (2)「北海道における古代から近世の遺跡の歴史」研究成果報告書、札幌学院大学人文学部、上野秀一・中田裕香・平川善祥・越田賢一郎・石川直章・藤井誠二・石井 淳 1999

「樺文土器集成」『海峡と北の考古学シンポジウム・テーマ2・3資料集Ⅱ』日本考古学協会 1999年度開路大会実行委員会編 287-322頁。

尾崎大真編 2009

「日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代」、『弥生時代の考古学 1 弥生文化の輪郭』同成社、225-235頁。

小杉 康編 2002

『北大構内の遺跡Ⅺ』北海道大学。

小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2004

『K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅰ(遺物・遺構編)』北海道大学。

小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2005

『K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅱ(自然科学分析および出土遺物・遺構考察編)』北海道大学。

小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2008

『北大構内の遺跡Ⅻ』北海道大学埋蔵文化財調査センター。

小杉 康・高倉 純・守屋豊人・坂口 隆編 2013

『北大構内の遺跡Ⅻ』北海道大学埋蔵文化財調査室。

小杉 康・高倉 純・守屋豊人・坂口 隆・本山志郎編 2018

『北大構内の遺跡Ⅻ』北海道大学埋蔵文化財調査センター。

小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2003

『北大構内の遺跡Ⅹ』北海道大学。

小林達雄編 2008

『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会、アム・プロモーション。

坂本 稔 2010

「較正曲線と日本産樹木—弥生から古墳へ—」『第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集』(株)加速器分析研究所、85-90頁。

穂織山積、五十嵐八枝子・近藤 務・鎌田耕太郎・吉田充夫・地徳力・外崎徳二・工藤千春・岡村 聡・加藤 誠 2007

「札幌市街域における150m掘削コアの第四系層序」『地質学雑誌』113巻 391-405頁。

島地 謙・伊東隆夫 1985

『図説 木材組織』地球社

森林総合研究所 日本産木材識別データベース

<http://db/ftpri.affrc.go.jp/WoodDB/IDBK/home.php> (2018年12月27日閲覧)

大丸裕武 1989

「更新世における豊平川扇状地とその下流氾濫原の形成過程」『地理学評論』62巻 589-603頁。

中村俊夫 2000

「放射線炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の14C年代』日本第四紀学会、3-20頁。

吉崎昌一編 1995

『北大構内の遺跡 平成3・4・5・6年度 10』北海道大学。

吉崎昌一・岡田淳子編 1983

『北大構内の遺跡 昭和56年度 [2]』北海道大学。

吉崎昌一・岡田淳子編 1988

『北大構内の遺跡 昭和60-61年度 [6]』北海道大学。

吉崎昌一・岡田淳子編 1990

『北大構内の遺跡 昭和64・平成元年度 [8]』北海道大学。

Bronk Ramsey, C. 2009

Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafflidan, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. 2013

Intcal3 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

Stuiver M. and Polach H. A. 1977

Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19 (3), 355-363.

報告書抄録

ふりがな	ほくだいこうないのいせき にじゅうご							
書名	北大構内の遺跡 XXV							
副書名								
巻次								
シリーズ名	北大構内の遺跡							
シリーズ号	XXV							
編著者名	小杉 康・高倉 純・守屋豊人・佐野雄三・伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絏一・Zaur Lomtadize・黒沼保子							
編集機関	北海道大学埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目 TEL.011-706-2671 FAX.011-706-2094							
発行年月日	2019年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査 面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いんげんこうきゅういせき K 3 9 遺跡	札幌市北区	1101	39					
いんげんこうきゅういせき 医学部百年記念館地点				43度4分39 秒	141度20分 20秒	20170807～ 20171020	746	建物建設工事
いんげんこうきゅういせき K 3 9 遺跡	札幌市北区	1101	39					
ちゅうおうキャンパス 教育学部北 地点				43度4分26 秒	141度20分 33秒	20171019～ 20171115	108	計画調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
医学部百年記念館地点	キャンプ址	撥文		焼土粒集中箇所3基、 土器片集中箇所4基、 礫集中箇所3基、木杭 址1基		土器、石器、礫		
中央キャンパス教育学部北地点	集落	撥文		竪穴住居址1基		土器		

北大構内の遺跡 XXV

平成 31 (2019) 年 3 月 31 日発行

発行 北海道大学埋蔵文化財調査センター
札幌市北区北 11 条西 7 丁目

編集 小杉 康・高倉 純・守屋豊人

印刷 朝アワード
060-0033 札幌市中央区北 3 条東 5 丁目
011-241-9341

HOKKAIDO UNIVERSITY

CAMPUS SITES

XXV



Archaeological Research Center,
Hokkaido University
March, 2019